

粒原第2・3号古墳発掘調査報告書

2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

粒原第2・3号古墳発掘調査報告書



2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、平成12（2000）年度に実施した広島県高田郡高宮町の町道勘部細河内線改良工事に
係る、拉原第2号古墳と拉原第3号古墳（高田郡高宮町大字原田字鳥越1725-4所在）の発掘調査
報告書である。
2. 調査ならびに出土遺物整理・報告書作成は、高宮町と委託契約を結び、財団法人広島県埋蔵
文化財調査センターが実施した。
3. 遺跡の発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究課調査研究第3係長
松井和幸、同主任調査研究員 石井哲之、同調査研究員 刈本英博が行った。
4. 遺構、遺物の実測および写真撮影は、上記の担当者が行った。
5. 本書の執筆・編集は、松井、石井が担当した。
6. 遺物実測図の断面は、須恵器：黒ヌリ、鉄器：白ヌキ
7. 遺物の法量のうち、推定復元した値と残存値については（ ）付きで記した。
8. 遺物番号は、第2号古墳、第3号古墳それぞれ通し番号で表示した。
9. 第1図は、建設省国土地理院発行の1:25,000地形図（安芸横田、前川）を複写して使用し
た。
10. 本書に使用した方位は、第2、6図は平面直角座標第Ⅲ系北、他は磁北である。
11. 石室の石材鑑定は、考古地質学研究所 柴田喜太郎氏の肉眼観察による。

目　　次

I. はじめに.....	1
II. 位置と環境.....	2
III. 調査の概要.....	7
拉原第2号古墳.....	9
拉原第3号古墳.....	25
IV. 出土遺物について.....	35
V. まとめ.....	73

I はじめに

町道勘部細河内線は、高宮町大字房後の町道前川粒原線から、高宮町大字原田の県道下北甲田線までの1.7kmの路線である。原田地区から町の中心部である佐々部地区への主要生活道路であるとともに、同地区から中国自動車道高田インター・エンジへアクセスする最短の路線である。また高宮中学校、高宮高等学校への通学路であり、隣接するスポーツ施設へ通じる路線である。

現在、町道前川粒原線が予定通り供用を開始したため、原田地区と佐々部地区との交通量が増大した。このためアクセス道路の強化と歩行者の安全の確保をはかる目的として平成11（1999）年度から「町道勘部細河内線」の改良工事事業が着手された。

粒原古墳群に関しては、以前からその存在がすでに知られていた。今回の事業で、粒原第2号古墳と粒原第3号古墳は完全に道路建設予定地内に含まれ、設計変更などで保存することが不可能であることから、高宮町は、1999年10月4日付けで文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）を文化庁長官に提出するとともに、広島県教育委員会（以下「県教委」という）と発掘調査に関して協議を重ねた。その結果、高宮町の委託を受けて2000年度中に財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）が発掘調査を実施することとなった。

これを受け、センターは2000年4月14日付けで文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の届出を広島県教育委員会教育長に提出した。

発掘調査は、5月22日から9月14日まで実施し、7月29日には遺跡見学会を実施したところ約150名の参加があった。

本書は以上のような経緯を踏まえて行われた発掘調査の成果をまとめたもので、今後埋蔵文化財の研究資料としてこの地域の歴史を明らかにしていく一助として寄与できれば幸いである。

最後に、発掘調査にあたっては、高宮町建設課、高宮町教育委員会並びに地元の方々の御協力と御理解をいただきと共に、発掘調査中には、センター調査指導委員潮見浩氏、同川越哲志氏、同河瀬正利氏の調査指導を受けた。記して感謝の意を表したい。



第1図 遺跡見学会

II 位置と環境

高田郡高宮町は、広島県の中央部北端に位置する面積124.4km²の町である。北西部は島根県邑智郡、北東は江の川を境に双三郡作木村、西は高田郡美土里町、南は高田郡甲田町と同郡吉田町、東は三次市と境を接している。

全面積のうち、山林が78.8%を占め平均標高は240mの高所に位置するが、町の北半分は急傾斜地であるのに対し、南半分は標高約300m程度の比較的なだらかな丘陵が続いている。河川は、町の北端を東から北西に向かって江の川が流れ、生田川、長瀬川などの支流がこれに向かって注いでいる。

古代には、現在の高田郡は東辺を高田、西辺を高宮と呼ばれていたようである。平安時代の『倭名類聚抄』には、安芸国高宮郡には荊田・内部・竹原・高宮・丹比・調覗（くるべき）の6郷が、高田郡には三田・豊嶋・風速・麻原・川立・松木・栗屋の7郷が見える。

粒原第2・3号古墳は、高宮町の南端部に位置し（高宮町大字原田字鳥越1725-4）、生田川支流の房後川のさらに支流の粒原川左岸の低丘陵上に存在している。標高は約300mで、眼下に粒原川の両岸に広がる小開析谷を望み、現在は水田が広がっている。古墳石室入口と眼下の水田面との比高は約10mである。

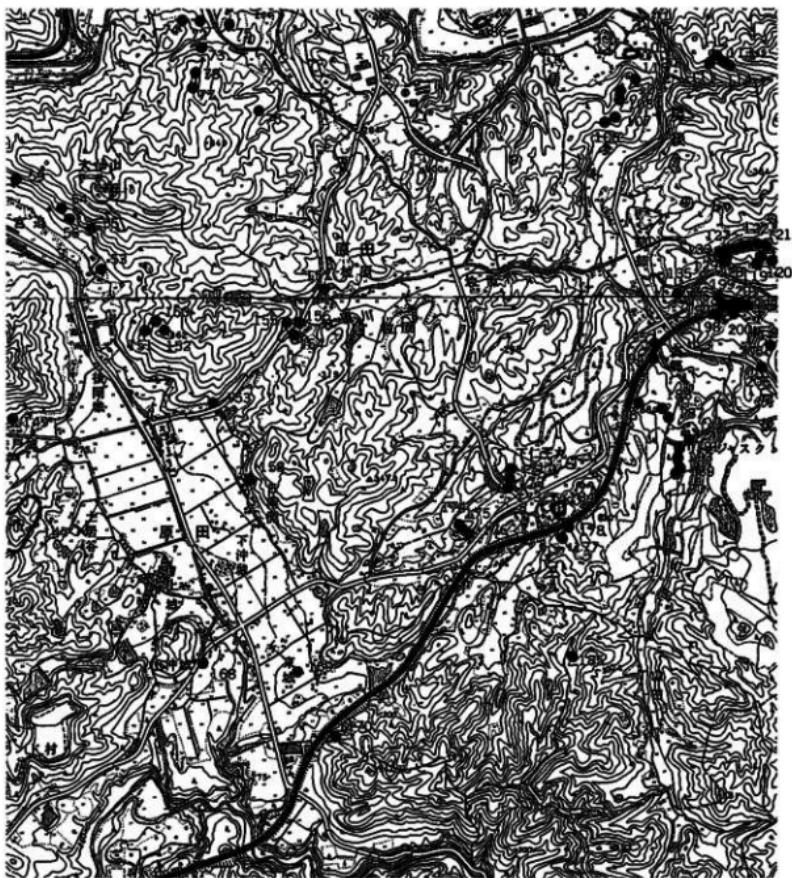
周囲には4基の古墳が知られている。谷奥から順に粒原第1号古墳、今回調査対象となった粒原第2・3号古墳、さらに粒原第4号古墳が存在する（第6図）。粒原第1号古墳は、第2号古墳の南西約150mに位置している。直径約28.4mの本古墳群中最大の円墳であるが、墳丘の大半を町道改良工事によって削平されている。内部主体は北東に開口した横穴式石室で、奥行き4m以上、幅は入口で0.8mである。第4号古墳（第3～5図）は、第3号古墳の北東約160mに位置する直径約22m、高さ約3.8mの円墳である。内部主体は横穴式石室で、長さ7.2m、幅1.9m、高さ2.5m、南東に開口している。正式な発掘調査はなされていないが、瑪瑙製勾玉1、碧玉製管玉2、貝製小玉3、耳環5、鉄鎌、馬具片、須恵器（杯、高杯、壺）多数などが出土している。

1997年3月現在で、町内の埋蔵文化財包蔵地は211か所確認され、この内古墳は約150か所と全体の70%余りを占めている。

縄文時代の遺跡は、川根の杉ノ原1号遺跡（町史跡）が知られている。1947年墳塚を田に改修する工事の際、地表下1m位から石圓いの炉状の遺構と縄文後期の土器片、石斧、蔽石などが出土している。

弥生時代の遺跡は、中国自動車道の建設の際に、房後の寸志名遺跡、白鳥遺跡、新迫南遺跡などが発掘調査されている。寸志名遺跡は、東に延びる低丘陵上に古墳時代前期の14軒の竪穴住居跡などが確認された集落遺跡であるが、遺構に伴わないが弥生時代中期後半塩町式土器の壺、甕、高杯なども出土している。船佐の名広遺跡B調査区では、後期前半の竪穴住居跡2がそれぞれ2回建て替えられていた。

白鳥遺跡は、全長19.7mの前方後円墳である白鳥古墳（町史跡）の南側丘陵上に存在した墳墓



第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1 : 25,000) (遺跡番号は、広島県教育委員会『広島県遺跡地図IV(高田郡)』1997年に一致している。)

53 宮迫第1号古墳~56 宮迫第4号古墳 59 宮迫第7号古墳 72 成安第1号古墳~78 成安第7号古墳 86
 明見田遺跡 105 名広遺跡 106 蔵掛第1号古墳~110 蔵掛第5号古墳 111 下房後第1号古墳~114 下房後
 第4号古墳 119 新迫第1号古墳~130 新迫第12号古墳 135 勘部古墳 147 高橋城跡 149 笹原古墳 150
 後岡城第1号古墳~152 後岡城第3号古墳 153 後岡城南古墳 154 拉原第1号古墳 155 拉原第2号古墳
 156 拉原第3号古墳 157 拉原第4号古墳 158 日南御第1号古墳 168 龍王古墓 169 東城古墓 170 明連
 窟跡 171 仁王丸第1号古墳~178 仁王丸第8号古墳 184 仁王丸遺跡 185 段城山古墳 186 寸志名遺跡
 187 上房後第1号古墳 188 上房後第2号古墳 189 山田第1号古墳~192 山田第4号古墳 193 山田積石塚
 194 白鳥遺跡 195 白鳥古墳 196 新迫南第1号古墳~202 新迫南第7号古墳 205 表郷古墳 206 挖削古墳

群である。土器棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓群、箱式石棺墓などが検出されている。墳墓の時期は、土器棺墓は古墳時代前期で、箱式石棺墓は5世紀以降と推定されている。なお遺構に伴って出土したものではないが、周囲からは弥生時代中期後半の土器が出土している。⁽¹⁵⁾

新迫南遺跡群は、東西にびる丘陵尾根上に存在する遺跡であった。埋葬土壙6、石蓋土壙墓1、箱式石棺墓1、土壙5など弥生時代の遺構と、5世紀代を中心とする円墳7などが検出された。⁽¹⁶⁾

その他、弥生時代中期の遺跡としては佐々部の明見田遺跡、後期の遺跡としては来女木の向原遺跡、原田の仁王丸遺跡などがある。

古墳時代の遺跡は、1963年の県パイロット開拓事業に伴う羽佐竹の後原古墳群、成安古墳群の調査に始まって、前述の中国自動車道の建設など現在までいくつかの調査例がある。

成安第3号、第4号古墳は、堅穴式石室の外から6世紀中葉前後に比定される須恵器の杯3、提瓶1、壺1が出土している。このことから、当地域では他の地域に比べ横穴式石室の導入がかなり遅れたことが指摘されている。⁽¹⁷⁾

来女木の石井ヶ原遺跡群のうち第1号古墳は、直径約7m、高さ約1mの円形の積石塚、第2号古墳は直径約7.2mの箱式石棺を内部主体とする円墳であった。第1号古墳は、墳丘ないしは盛り土中からTK208併行期の須恵器が出土しているが、調査者は同時に出土しているTK43併行期に近い年代を古墳の築造時期と推定している。なお埋葬施設として、内法で長さ約1.9m、幅約0.7mの長方形の範囲が確認されており、副葬品として長さ67.8cm、刃部長52.9cmの鉄剣1が出土している。副葬品の状況はやや古い古墳の様相を帶びており、積石塚である点など第1号古墳はTK208併行期の可能性も考えられる。第2号古墳は、側石が2段に積み重ねられた小型堅穴式石室状の内部主体で、出土須恵器から6世紀後半頃と推定されている。⁽¹⁸⁾

横穴式石室塚を内部主体とする古墳群は、後原第2号古墳、成安第2号古墳、成安第5号古墳などいずれも石室中央部に障石を置いて前室、後室を区別したものや、成安第2号古墳では後室、後原第2号古墳では前室敷石床の上に大型の須恵器を割って棺床施設をつくっている例が多い。また羽佐竹の権現追古墳（7世紀前半）は石室奥に敷石による棺床施設を造っている。こうした敷石、土器床などの施設は、高田郡内およびその周辺における後期古墳の特色の一つでもある。

古墳時代の集落遺跡には、船佐の名広遺跡がある。県営圃場整備事業（船佐地区）にともなってA地区とB地区の2地点が発掘調査された。⁽¹⁹⁾ A地区では、古墳時代前期の住居跡、同終末期の住居跡状遺構、中世の掘立柱建物跡、土壙などが検出されている。またB地区では、古墳時代前半期の堅穴住居跡3、掘立柱建物跡8などが確認されている。

また当地域には、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器・瓦生産の窯跡が点在していることが知られている。

原田の矢賀追窯跡は、第1号、第2号の2基の窯跡が中国自動車道の建設にともなって発掘調査された。第1号窯跡は、焚口部および燃焼部の一部が破壊されていたが、現存長6.9mの地下式

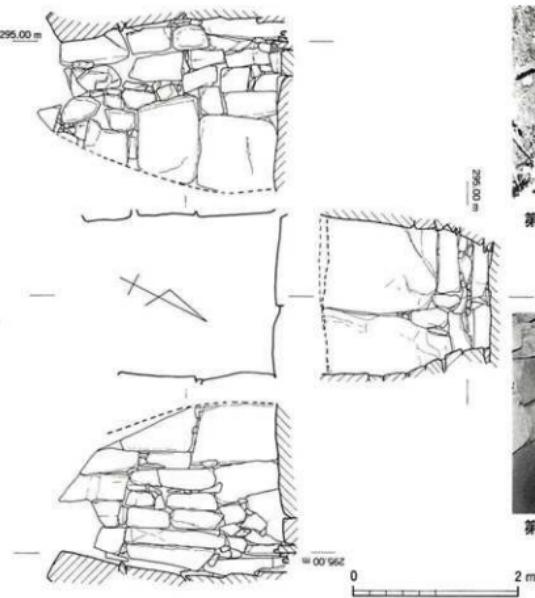
無階無段登窓であり、須恵器杯蓋、杯身、高杯、壺などが出土している。第2号窓跡は、現存長7.19mの地下式無階無段登窓であり、杯蓋、高杯、盤、瓶、壺、瓦が出土しており、瓦陶兼業窓跡である。年代は、出土須恵器に若干の時間幅は存在するが、いずれも中心は7世紀中葉前後と推定され、構築順序は第2号窓跡→第1号窓跡と考えられている。⁽¹⁾

原田の明連窓跡は、矢賀追窓跡の東約3kmの地点に位置している。窓跡の全長は7.6mの地下式無階無段登窓である。須恵器杯蓋、杯身、高杯、壺などが出土しており、7世紀前半頃の窓跡と推定されている。⁽²⁾

このほか町内には、6世紀後半頃の操業と推定されている来女木の行田窓跡なども確認されている。当地域の後期古墳には多量の須恵器が副葬されており、こうした窓跡が近くに多数存在していたことと関連があるであろう。またこうした生産遺跡の出現と古墳が多数存在する（大部分は後期）こととはあるいは何らかの関連があるとも考えられる。つまり爆発的に増加する後期古墳の被葬者層は、こうした須恵器の生産者集団などと強い関連があったのではないだろうか。

註

- (1) 高宮町「第1章 古代 第1節 高宮の遺跡と古墳」「高宮町史」1976年
 - (2) 広島県教育委員会「広島県遺跡地図IV（高田郡）」1997年
 - (3) 桑原隆博「寸志名遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 広島県教育委員会 1979年
 - (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「名広遺跡一B調査区一」1987年
 - (5) 三好晴弘「白鳥遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 広島県教育委員会 1979年
 - (6) 新谷武夫・加藤光臣「新迫南遺跡群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 広島県教育委員会 1979年
 - (7) 潮見浩「高宮町古墳群の緊急調査」「広島県文化財ニュース」第19号 広島県文化財協会 1963年
 - (8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石井ヶ原遺跡群」1991年
- 第2号古墳は、後述する横口式の堅穴式石室と考えられる。
- (9) 前掲註(7)文獻
高宮町教育委員会「復現追古墳」1994年
 - (10) 広島県立埋蔵文化財センター「名広遺跡一A調査区一」1987年
前掲註(4)文獻
 - (11) 新谷武夫・向田裕始「矢賀追遺跡群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 広島県教育委員会 1979年
向田裕始「高宮町矢賀追窓跡の調査」「広島県文化財ニュース」第72号 広島県文化財協会 1977年
 - (12) 中田昭「明連窓跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 広島県教育委員会 1979年



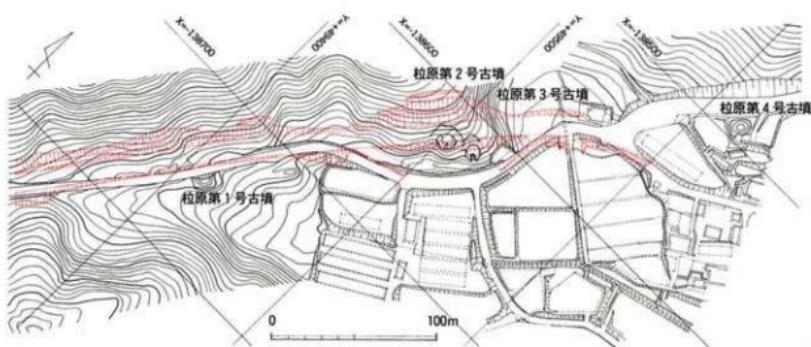
第3図 桩原第4号古墳 石室実測図 (1 : 60)



第4図 桧原第4号古墳 (南東から)



第5図 桧原第4号古墳 石室内
(南東から)



第6図 遺跡周辺地形図 (1 : 3,000)

III 調査の概要

第2号古墳は、直径11.5(東西)×9.7(南北)m、高さ2.5mで、南東に開口した横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室は片袖式で、大きさは、奥行き6.7m、幅は奥壁部で1.5m、玄室中央部で1.7m、羨道部で1.1m、高さは1.8mである。ただ墳丘上で羨道部入口から奥壁に向かって左側から盗掘孔が掘られていたため、盗掘孔周囲の側壁と天井石は石室内部へ向かって崩落していた。

玄室内部には、中央部は須恵器大甕を割って床面に敷いて須恵器床を造り、奥は平石を並べた敷石を形成している。敷石は上下2段存在し、大甕の土器床が下部の敷石面と同時期の床面と推定された。須恵器床上面からは鉄刀、鉄鎌、釘など多数の鉄器類、耳環などが出土した。

第3号古墳は、第2号古墳の東に近接する、直径8.5(東西)×9.5(南北)m、高さ2.7mの南東に開口した横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室は無袖で、中央部分が最も幅が広い造りになっている。大きさは、奥行き5.9m、幅は奥壁部1.2m、中央部1.6m、羨道部1.0mである。羨道部分の天井石はすでに何枚か外され、石室は開口していた。

石室右側奥には、大型平石2枚を床面上に敷き、手前に平石を立てて仕切り石としたベッド状の棺台が存在した。

遺物は、棺台立石の手前から完形の須恵器提瓶、平瓶、懸などが出でた。また棺台石の上面あたりに埋まっていた後、土を踏み固めたような面が存在し、閉塞石内側でその面とほぼおなじ高さから高台付杯の完形品1（第73図119）が出土した。

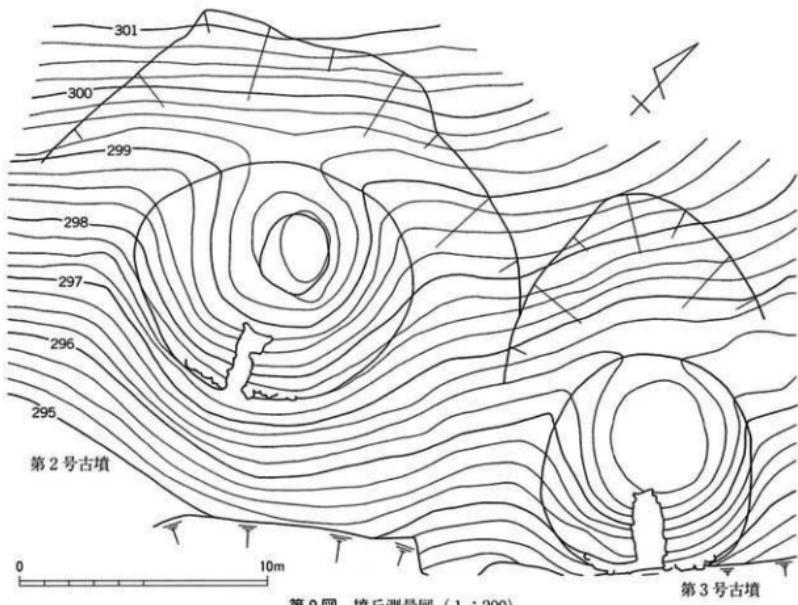
古代の段階ですでに石室は開口していたと推定される。



第7図 調査前近景（南東から）左：第2号古墳 右：第3号古墳



第8図 墳丘検出状況（北西から）左：第3号古墳 右：第2号古墳



拉原第2号古墳

墳丘（第9図） 直径11.5(東西)m×9.7(南北)m、高さ2.5mの円墳である。入口は完全に埋まっていたが、墳丘頂部西側に盗掘孔が開けられていた。

墓道は、石室入口から真直ぐ斜面下方にかけて長さ約3m、幅は上端部で約1m、下端部で約0.5mの規模で確認された。

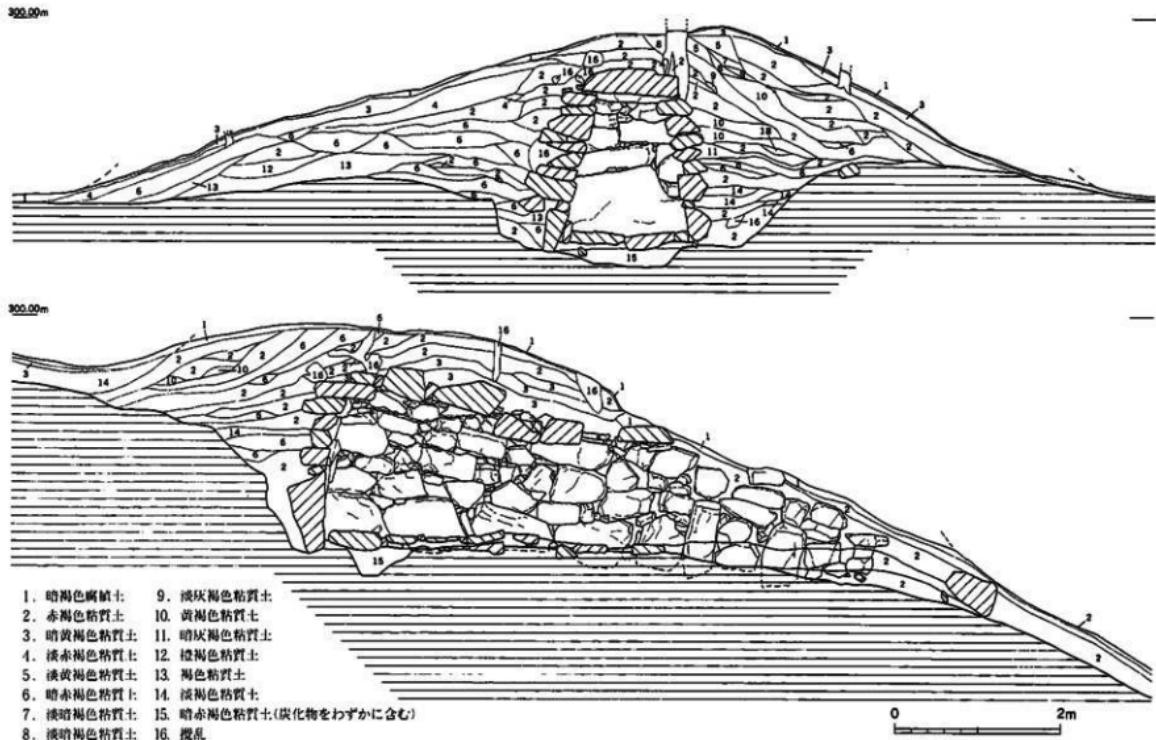
周溝は、墳丘背面にのみ掘られていた。丘陵斜面の傾斜地を掘り下げた浅いものではあるが、墳丘裾との幅は約4.5mと広い。また外周北端中央の約10m余りは本来の周溝の深さは約30cmである。丘陵の傾斜をうまく利用した立地をしており、丘陵下から見上げた墳丘は、実際以上に大きく見える。

なお、墳丘盛り土中からは大甕片が数点出土した。また、石室入口から南西約6mの墳丘裾部の表土直下からは鉄刀1（第75図193）が出土した。鋒の状況などからは古相を帯びているが、盗掘孔のほぼ真南に位置していることから、主体部から取り出されたものが盗掘時に放置されたものとも考えられるが、形態が特殊であることなどから、古墳に副葬された刀であるかどうかは必ずしも断定できない。

外護列石は、石室入口の左右約2mの範囲に人頭大の角礫を2～3段に重ねて並べている（第31図）。外護列石の東側は、入口から約2mの部分で墳丘裾のラインを外れ、内側へ急角度で折れ曲がっている。この部分の石は墳丘盛り土下に完全に隠れるため、機能などは不明である。単に



第10図 第2号古墳全景（南から）



第11図 第2号古墳 墳丘土層断面実測図 (1 : 60)



第12図 外護列石（西側）（南から）



第13図 外護列石（東側）（南から）



第14図 墳丘盛り土土層（東側）（南から）



第15図 墳丘盛り土土層（北側）（東から）

余った石を並べたのであれば、第3号古墳の外護列石も同様の造りであることは有り得ない。また石室掘方内の堆積土の流失を防ぐような目的も推定されるが、掘方の位置とは必ずしも一致していないので、そうした理由はあたらぬ。

石室（第16、17図） 石室主軸はN24°Wで、南東に開口している。入口は開口していなかったが、墳丘頂部西側に盗掘孔が開けられていた。西側側壁の上部をくずして内部に侵入している。そのために奥から4~6枚目までの天井石は、西側が石室内部へと落ち込んでいた。

石室は、片袖の横穴式石室である。大きさは、奥行き6.7m、幅は羨道部入口で1.0m、玄室側で1.1m、玄室の幅は奥壁で1.5m、中央部1.7mで、高さは奥壁少し手前で約1.8m、羨道近くで約1.3mである。

石室の構築方法は、石室最下段の基底石は大型平石を広口積みに積み、それから上は平石を比較的大きいものを長手積みに積み、その間に小さいものを小口積みにして間を埋めて高さを調整するような石の積み方をしている。両側壁とも6~7段程度に石を積んでおり、天井部分で両側から約40cmせり出す持ち送りとなっている。また最奥の天井石は、一段低くなっている。

奥壁は、1.6×1.0×0.4mの大型平石を最下段に据え、それから上は大型の平石を長手積みに3~4段積んでいる。天井部分は、約20cm程度内側にせり出す持ち送り構造となっている。

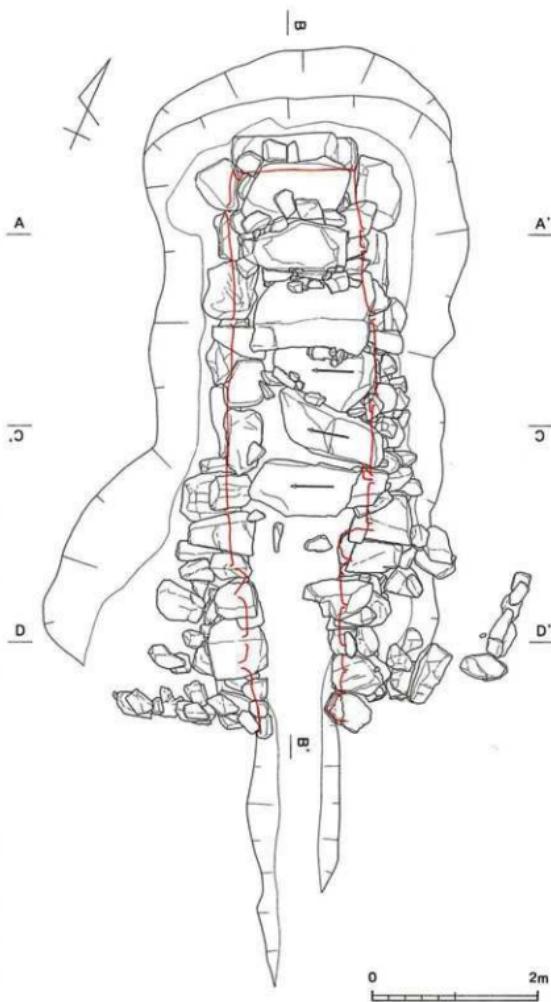
石室の構築順序は、まず東側の石を奥壁側から羨道部に向かって並べ、次に奥壁下段の石を東側が側石に接するように据え、最後に西側壁最下段の石を据えている。東側の石の方が厚みがあり、西側の石に比べて大きい。なお西側最奥最下段の石が大きすぎるため、石を据えるのに当初の石室掘方よりもさらに西側に張り出して掘方を一部拡張している。

なお最下段の基底石は、羨道部の石は床面からの深さ20cmと掘方の深いものが多いが、玄室側は比較的浅い。

石室の構築に用いられている石の石材は、大部分斑状花崗岩である。

敷石・土器床（第34図）

玄室最奥部から約2.5mまでの範囲には、敷石が敷いてあった。大きさは、一边約70~80cmで、厚さは20~10cm程度の方形に近い大型平石である。東側には一部敷石の存在しない範囲もあるが、玄室内には同様な大きさの石がいくつか検出されており、元々は奥壁から2.5m程度の範囲までは



第16図 第2号古墳 石室実測図(1) (1:60)

全面に敷石が敷かれていたと推察される。

なお、敷石の石と石との間には所々隙間を埋めるような感じで、須恵器杯身、杯蓋、高杯などが割って埋め込まれていた。この埋め込まれていた須恵器片は、羨道部や玄室内出土須恵器片と接合するものが多い。したがって、敷石は石室構築時のものでは無く、追葬に伴って敷かれたものであると考えられる。

敷石端から袖部にかけての東側半分には大甕の破片を床面に敷いた土器床が形成されていた。土器床に混在して須恵器杯身、杯蓋、長頸瓶、平瓶、提瓶、高杯などが多数出土している。一部土器床と混在しているような状況も見られるが、基本的には土器床の上面から出土していることから、大甕以外の須恵器は全て土器床上面の副葬遺物と考えられる。なお、明確な境は認められないが土器床とそれ以外の副葬土器とは石室内において分布範囲が若干異なっている。

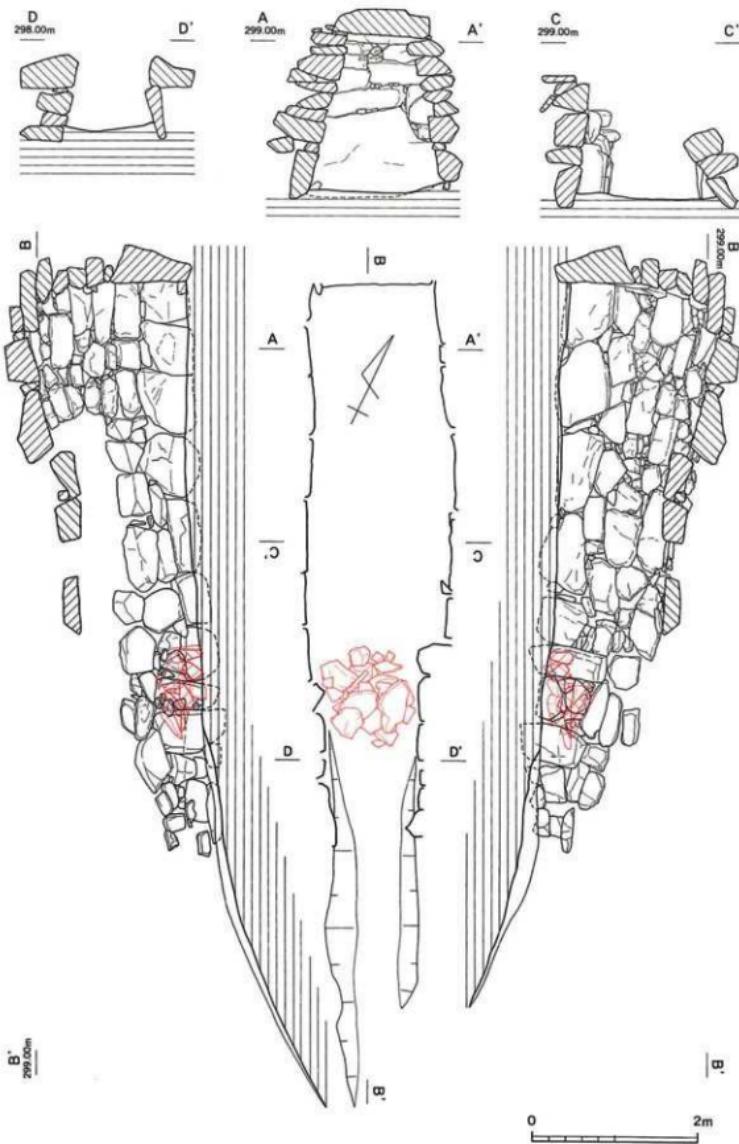
閉塞石（第17、31図）閉塞石は、比較的大型の割石を用い、袖に近い位置に床面から50cm程度の高さまで存在した。したがって閉塞石は羨道部天井までは達しておらず、ある時期からは開口していたと考えられる。なお、閉塞石は羨道部入口に近い位置には無く、袖に近い部分のみ存在していた。閉塞石の間からは、耳環1、鉄鎌、須恵器高杯、杯身、などが出土した。追葬時に先にあった副葬品をかき出した結果と考えられる。

石室掘方（第16図）3.8(東西)×7.8(南北)mと第3号古墳よりも一回り大きい掘方である。深さは、奥で約1.4m、入口付近で約0.6mの規模である。東側側壁部分はほぼ直線的であるが、西側側壁部分は基底石に合わせて外側へ拡張した部分がある。特に石室入口から約3mまでは、ハの字状に大きく外に開いている。特別意味があったとも考えられないが、入口を塞ぐように外護列石を並べ、側壁の基底石の背後には若干の石が無造作に放り込まれていた。ただ特別控え積みを意識したような状況ではない。

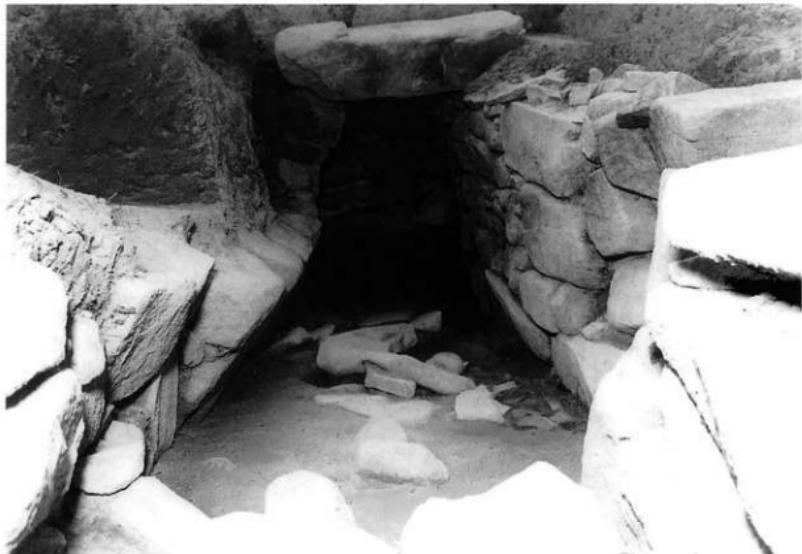
基底石の掘方は、あまり深く掘り込んでいる例はない。石は割石のため平たいものが多く、高さを調整するために石の周りを掘り込んで若干調整をする程度である。

遺物出土状況（第34図）敷石上面から須恵器大型の蓋、杯身、杯蓋が出土した。また土器床上面からは、須恵器杯身、杯蓋、高杯、提瓶、壺、甕、長頸瓶などが出土した。なお玄室中央西側からは鉄刀3本が重なって出土しており、この部分には須恵器の副葬品が見られない。鉄刀は遺体に副葬されたものであり、本来この副葬品の空白部には遺体が存在したため、土器床が形成されなかったと考えられる。また敷石下面には須恵器大甕を割って敷いた土器床が存在した。

また副葬土器の接合関係、セット関係を見ると、比較的付近から出土しているもの同士が一致しており、副葬された本来の位置からあまり動いていない。ただ石室最奥の敷石中から出土した高杯杯部が羨道部から出土した脚部と接合するような例もあり、追葬や盜掘によって本来の位置を移動しているものも若干ある。



第17図 第2号古墳 石室実測図(2) (1 : 60)



第18図 石室全景（南から）



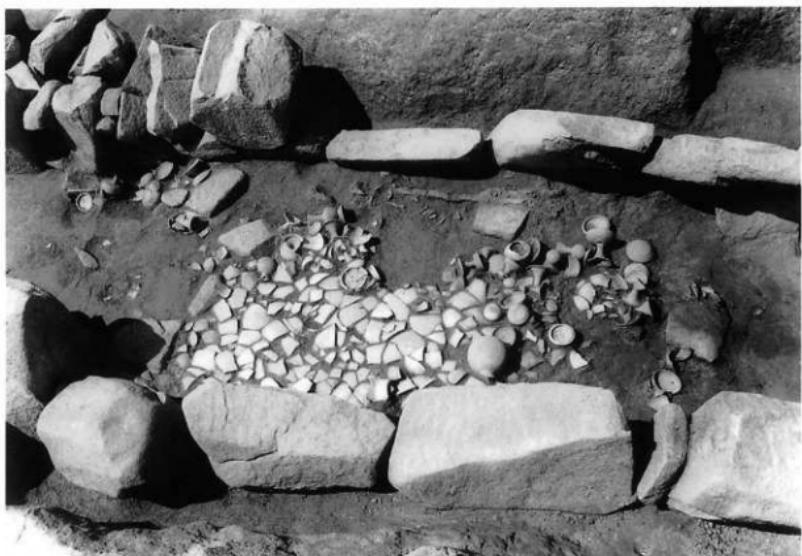
第19図 玄室内（南から）



第20図 玄室東側壁（南西から）



第21図 玄室敷石・遺物出土状況（東から）



第22図 遺物出土状況（玄室中央）（東から）



第23図 遺物出土状況（玄室入口付近）（東から）



第24図 奥壁・天井石（南から）



第25図 抽部御石（北から）



第26図 天井石検出状況（西から）



第27図 天井石検出状況（北から）



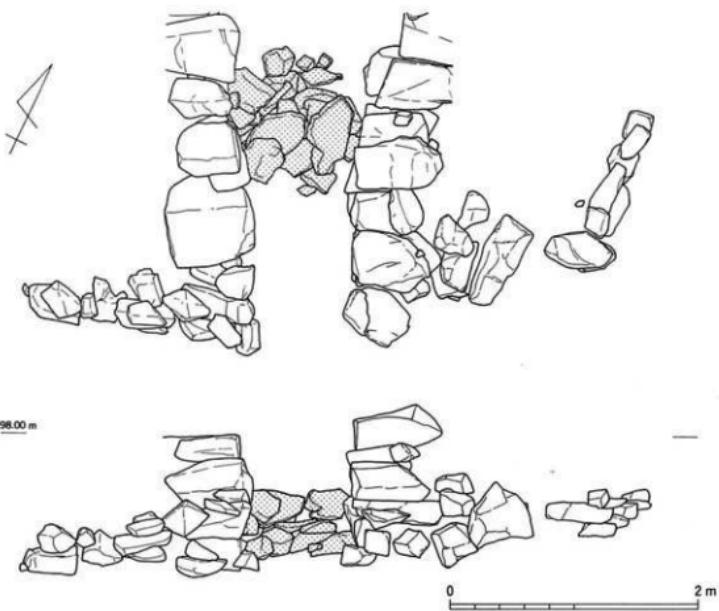
第28図 石室背面検出状況（北から）



第29図 閉塞石（南から）



第30図 閉塞石（西から）



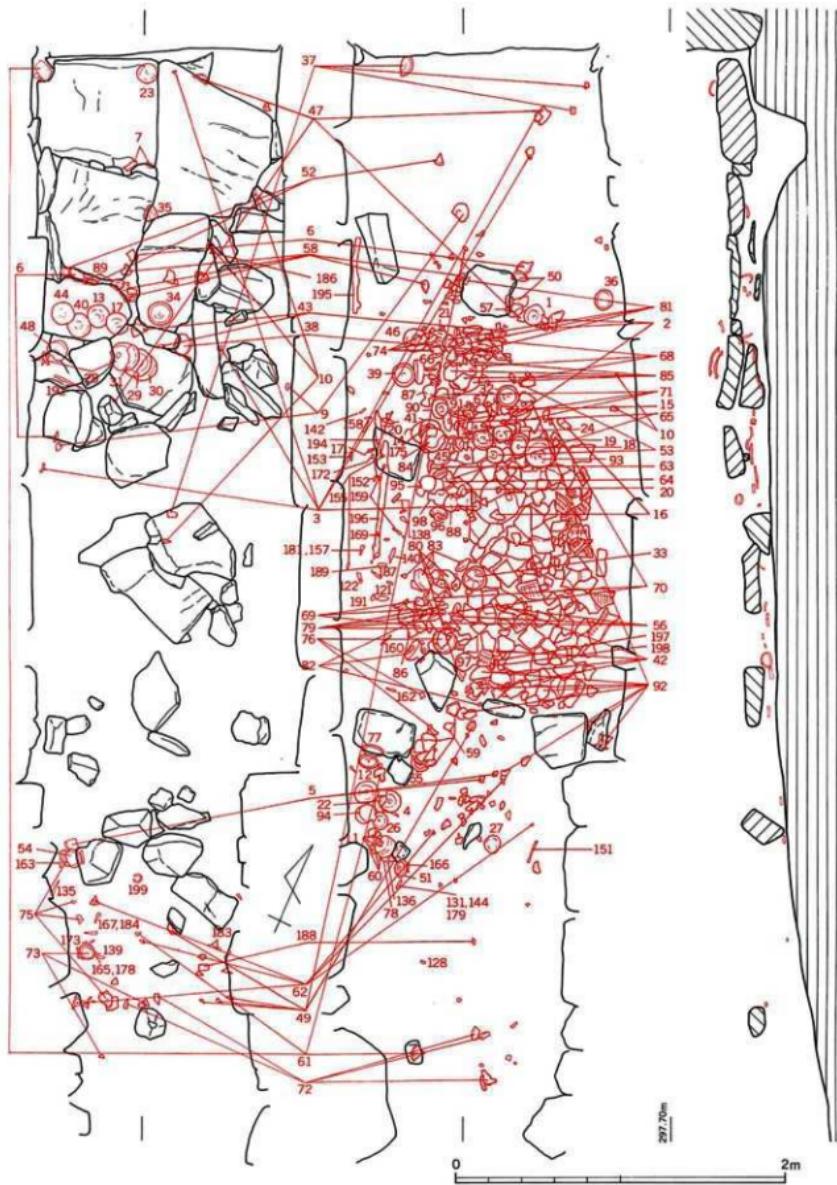
第31図 閉塞石・外護列石実測図（アミ目は閉塞石）（1：40）



第32図 石室基底石（北から）



第33図 石室掘方（北から）



第34図 石室内遺物出土状況実測図（1：30）



第35図 玄室敷石・遺物出土状況（南から）



第36図 羌道部遺物出土状況（西側入口付近）（北東から）

鉄器は、前述の鉄刀3本以外は、鉄鎌、釘などである。このうち大半が鉄鎌で、大部分鉄刀の周囲から出土しているが、副葬時の原位置を保っているとは考えられない。また釘も出土しているが、木棺の板を全て押さえるには数が少ない。木棺が完全に朽ち果てる前に全て外へ出したために釘が玄室内に残らなかったなど特別な事情を考慮する必要がある。

なお、墳丘盛り土中から大甕の破片が出土した。



第37図 玄室敷石・遺物出土状況（奥側）（北東から）



第38図 玄室敷石・遺物出土状況（北西隅）（南東から）



第39図 玄室敷石・遺物出土状況（奥側）（東から）



第40図 玄室敷石・遺物出土状況（中央）（南から）



第41図 玄室遺物出土状況（中央西側）（東から）



第42図 玄室遺物出土状況（中央）（西から）



第43図 作業風景（北西から）



第44図 作業風景（北から）

拉原第3号古墳

墳丘（第9図） 直径8.5(東西)m×9.5(南北)m、高さ2.7mの円墳である。現町道が直近を通り、道路の法面のためぎりぎりまで旧地形は削平されていた。したがって古墳への墓道などは残っていなかった。

周溝は、墳丘背面にのみ掘られ、丘陵斜面の傾斜を利用した浅いものではあるが、墳丘裾との幅は約3～6mとかなり広い（第9図）。なお埋土は厚さ10cm程度しか堆積しておらず、周溝内はほとんど埋まっていなかった。

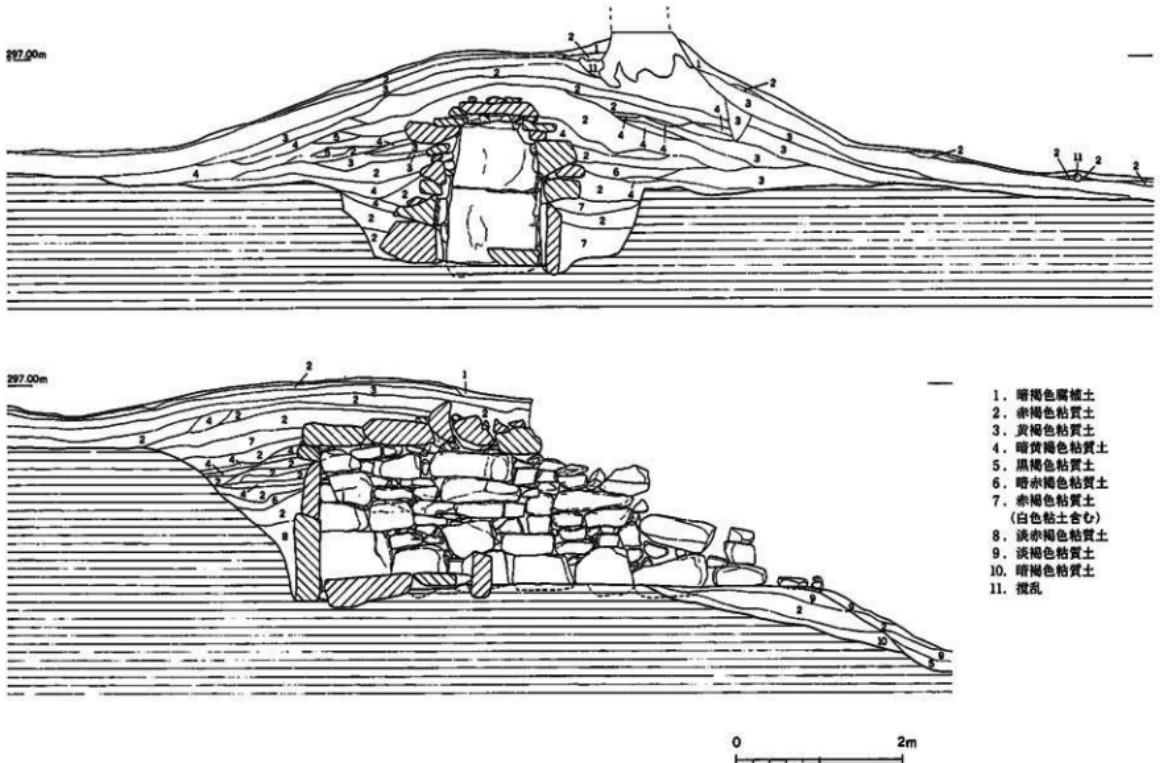
全体に丘陵の傾斜をうまく利用した立地をしており、丘陵下から望んだ墳丘は、実際の大きさ以上に大きく見える。

なお、墳丘西側の盛り土を中心、大甕の破片が盛り土下20～30cmの深さから数点出土した。極少量であることや特別意識されて置かれているような状況も見られないことなどから、墳丘盛り土を行う際に何らかの祭祀行為が行われたために混入したりしたのではなく、盛り土を行う際偶然混入したものと推定される。

外護列石は、石室入口西側で4個、同東側で7個確認された。第2号古墳と異なり石列は1段のみ人頭大の石を並べているが、長さ70cm程度の大型の石も見られる。なお東側は、第2号古墳同様大きくなった掘方の入口を塞ぐような形でほぼ直角に墳丘盛り土下に折れ曲がって石が並べられてあった。



第45図 第3号古墳全景（南東から）



第46図 第3号古墳 墳丘土層断面実測図 (1:60)



第47図 外護列石（西側）（南から）



第48図 外護列石（東側）（南東から）



第49図 墓丘盛り土土層（西側）（南から）



第50図 墓丘盛り土土層（東側）（南から）

石室（第51、57図） 石室主軸はN44°Wで、南東に開口している。入口はすでに開口しており、天井石も何枚かは無くなっていたが、全体の保存状態は比較的良かった。石室は、胴張無袖の横穴式石室で、奥行き5.9m、幅は羨道部1.0m、入口から約2mの部分が最大で1.6m、奥壁部1.2m、床面から天井石までの高さは1.6mである。入口から約2mの最大幅の部分まで閉塞石が見られることから、入口からこの部分までが羨道部分に相当すると考えられる。

石室の構築方法は、側壁最下段の基底石は大型平石を広口積みに積み、それから上は平石を比較的大きいものを長手積みに積み、その間に小さいものを小口積みにして間を埋め高さを調整するような石の積み方をしている。両側壁とも5~6段程度石を積んでおり、また天井部分で両側から約30cmせり出す持ち送り構造となっている。

奥壁は、1m四方で厚さ35cm程度の平石を下段に据え、それより若干小型の同様な平石を上段にとほぼ垂直に二段重ねて形成している。

石室の構築順序は、まず西側側壁最下段の石を奥壁側から羨道部に向かって並べ、次に奥壁下段の石を西側が側石に接するように据え、最後に東側壁最下段の石を据えている。なお、西側最奥の最下段の基底石が大き過ぎたため、当初掘られたと考えられる石室掘方よりも、若干東側に寄って石室が構築されている。それに伴って東側の掘方は、石の規格に応じてさらに東側へ拡張

して掘られている。

なお、最下段の基底石は比較的方形に整ったものが使用されているため、基底石を据えるための土壙は高さを調整する程度であり、深さ数cmの浅いものが多い。

石室の石材は、斑状花崗岩が大部分であり、第2号古墳とほとんど同じである。

棺台（第63図） 石室最奥東側に接して、ベッド状の棺台が存在した。 $1.0 \times 0.6 \times 0.2\text{m}$, $0.7 \times 0.7 \times 0.15\text{m}$ の平石2枚を台として床面上に敷き、入口側に $0.8 \times 0.5 \times 0.2\text{m}$ の平石を立てて境としている。平石2枚によって形成される面積は、 $1.7 \times 0.7\text{m}$ 程度であり、大人を横たえるのに十分な面積である。ただ上面から鉄釘などは全く検出されなかったことから、被葬者は木棺などには納められず、直接平石の上に横たえられていた可能性が強い。

境の立石の西側に、西側の側壁にもたれかかるように比較的大きな1枚の平石が存在した。何らかの形で立てた境石の可能性も考えられたが、付近では石を据えるための掘方などは全く検出されなかったことから、当初から存在した石ではなく、後世持ちこまれたものと考えられる。

棺台石の周囲から角礫は若干出土したが、天井からの崩落などによるもので、意図的に置かれたような石は見られなかった。

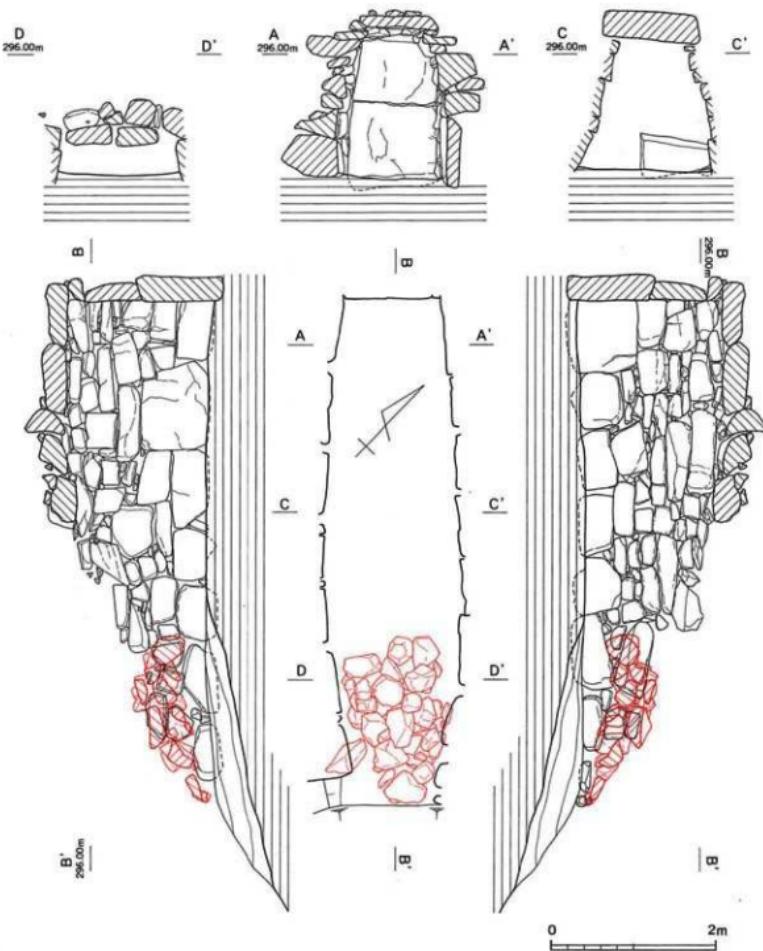
なお、棺台の設置状況等から考えて、棺台は石室構築にともなって当初から設置されたものと考えられる。

閉塞石（第51、61図） 石室入口から約2mまでの部分から人頭大の閉塞石が一部残存していた。ただ閉塞石の最下段は、石室床面の上に約20cm土が堆積した上に相当する。すなわち、追葬時に当初の閉塞石を全て除去し、石室内の土はある程度かき出した上に追葬時の閉塞石を積んだと考えられる。閉塞石の間から提瓶（全体の約70%程度の破片）1個体（第73図118）と耳環（第75図207）が出土しており、追葬時に混入したと考えられる。

閉塞石の北西部から出土した高台付杯はやはり床面から約20cm程度浮いた位置で出土しているが、古墳の下限を示しているかどうかは不明である。なお、この床面から20~30cmの位置（棺台立石の上面あたりに相当）の土層上面はかなり硬く締まっていた。付近の人の言によると、本古墳は近年まで恒常的に人の出入りがあったそうで、そうした人の出入りによって当時の土層表面が硬く締まったものと考えられる。

石室掘方（第57図） 前述のように石室の構築によって、東側部分が大きく拡張されている。当初は、 $3 \times 7\text{m}$ の平面長方形の土壙を、奥で約1.5m、入口付近で約0.4mの深さの規模に掘られていたと推定される。なお入口から閉塞石の下あたりまでは盛り土であるが、それから奥の部分は地山を削平して平坦面を造成している。

石室掘方と側壁との間は、黄褐色や赤褐色粘土を互層に堆積させている。控え積みなどは全く見られない。



第51図 第3号古墳 石室実測図(1) (1 : 60)



第52図 玄室内（奥壁・側壁）（南東から）



第53図 西側壁（東から）



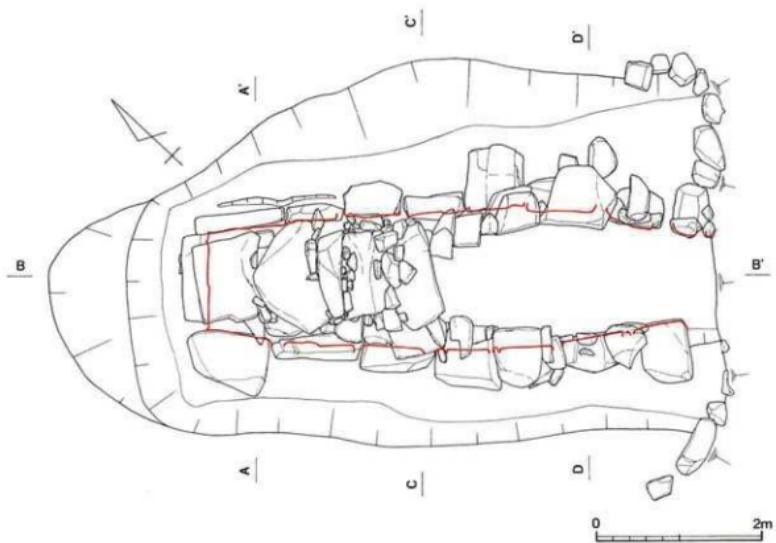
第54図 東側壁（南から）



第55図 棺台石（西から）



第56図 石室基底石（北西から）



第57図 第3号古墳 石室実測図(2) (1 : 60)



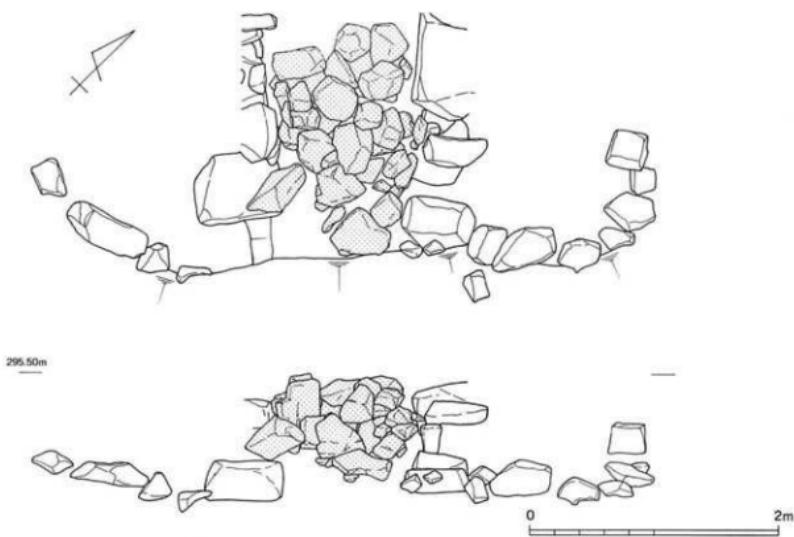
第58図 天井石検出状況（北西から）



第59図 閉塞石（南東から）



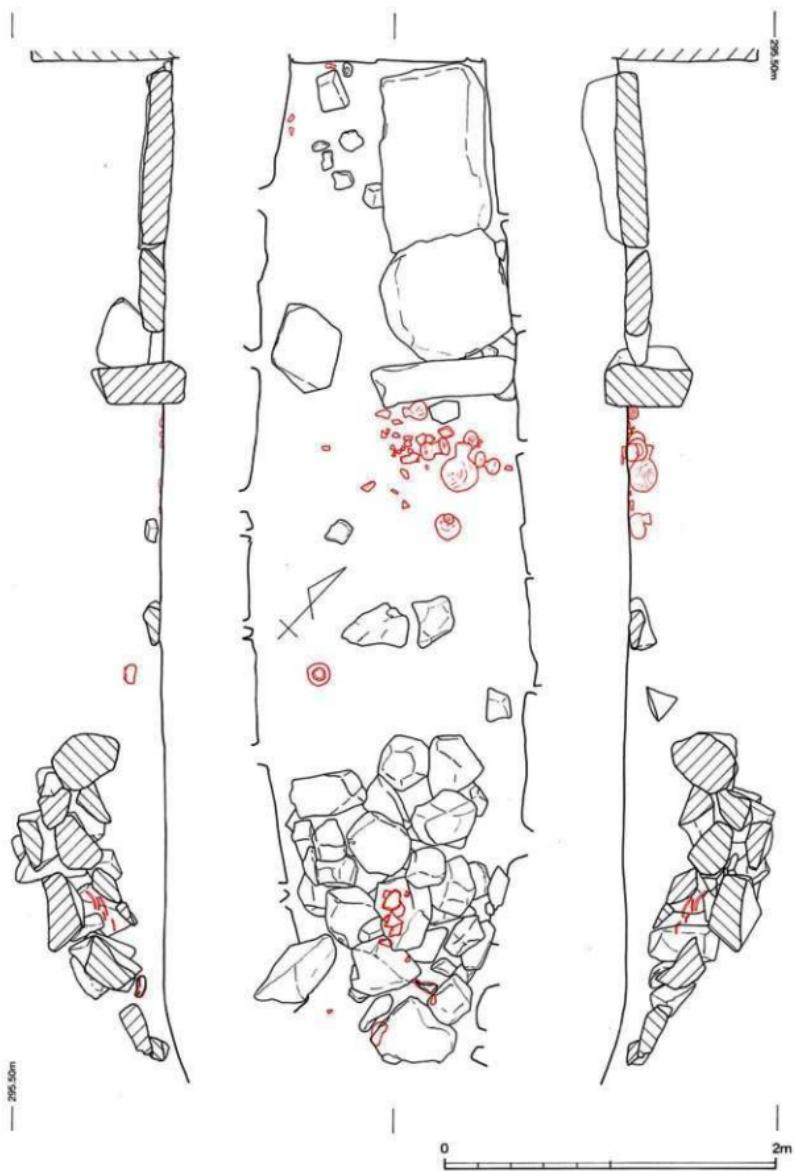
第60図 閉塞石内遺物出土状況（西から）



第61図 閉塞石・外護列石実測図（アミ目は閉塞石）（1：40）



第62図 石室掘方（北西から）



第63図 石室内遺物出土状況実測図（1：30）

遺物出土状況（第63図） 棚台石立石の入口側に接して、須恵器甌、提瓶、平瓶の完形品および高杯脚部などが集中して出土した。位置から考えて、棚台上の被葬者に伴う副葬品と推定される。したがってこの位置の土器の時期は古墳の築造時期と似た時期であると推察される。なお閉塞石内出土の提瓶と耳環は、追葬に伴う副葬品のかき出しによるものと考えられる。

その他、閉塞石の内側約50cmで、床面から約20cmの位置から高台付杯が伏せられた状態で出土した。棚台立石の上面に近いレベルからの出土であり、ほかには全く同時期の遺物は見られないが、石室がある程度埋まった状態でこの須恵器甌の時期に何らかの形で再利用されたと考えられる。

なお、墳丘盛り土中からは大甌破片と提瓶（第73図117）が出土した。



第64図 遺物出土状況（玄室入口付近）（東から）



第65図 遺物出土状況（玄室中央東側）（南東から）

N 出土遺物について

(1) 須恵器

第2号古墳からは、杯蓋27点、蓋8点、杯身22点、長頸瓶4点、高杯24点、壺1点、台付碗1点、甌4点、提瓶7点、大甌1点が出土している。

杯蓋（1～27） 形態的特徴や調整面での特徴、法量の違いから杯蓋1類（1～5）、杯蓋2類（6～12）、杯蓋3類（13～18）、杯蓋4類（19、20）、杯蓋5類（21）、杯蓋6類（22～27）に分類される。

杯蓋1類（第66、76図） 1～3は玄室中央部から、4・5は羨道部から出土した。いずれも高杯5類とセット関係になる。天井部はやや丸く、ゆるやかにカーブを描いて口縁部にいたる。口縁部はわずかに外傾し、端部は丸い。調整は、天井部の1/2までは回転ヘラケズリを施し、口縁部との境に1条の凹線がめぐる。内面中央部は丁寧な仕上げナデである。ロクロはいずれも時計回り。

杯蓋2類（第66、76図） 6・7は玄室奥寄りの敷石の間に詰められたように、8～10は玄室奥寄りの敷石の下から、11・12は羨道部西側の閉塞石直近の地点から出土した。11・12は破損することなく完形であった。天井部はほぼ平坦でゆるやかにカーブする。口縁部との境に稜がつく。口縁部は直立気味か、やや内傾するものの端部はわずかに尖り気味に丸くおさめる。天井頂部は1/3付近まで回転ヘラケズリの後、雑なナデ。内面中央部は丁寧な仕上げナデを施す。ロクロはいずれも時計回り。

杯蓋3類（第66、76図） 13・17は玄室奥西側の敷石の上に伏せた状態で、14～16・18は玄室中央から出土した。天井頂部は回転ヘラケズリの後ナデつけ、18は丸いがほかはほぼ平坦である。ゆるやかにカーブして口縁部にいたる。天井部と口縁部との境に稜はない。口縁端部はわずかに外反して丸くおさめる。

杯蓋4類（第66、76図） 19・20は玄室中央から出土した。1～3類・5・6類と比べて器高が高い。天井部は回転ヘラケズリを施し平坦で外方にゆるやかに開く。口縁部との境に稜がつき、口縁部はやや内傾して端部を丸くおさめる。口径13.1～13.3cm、器高5.0～5.2cm。

杯蓋5類（第66、76図） 21は玄室中央奥寄りから出土した。1～4類・6類と比べて器形が扁平である。口縁部はわずかに外傾し、端部は丸くおさめる。天井部は1/2まで回転ヘラケズリの後ナデつけ。内面中央部はほぼ一方向の仕上げナデを施す。口径13.4cm、器高3.3cm。

杯蓋6類（第66、76図） 22～27は1～5類と比べて、小型である。23は玄室奥の敷石の上、24は玄室中央土器床の上、25は玄室奥の床面を掘り込んだ埋土中、22・26は羨道部西側の閉塞石直近、27は羨道部閉塞石の下から出土した。いずれも完形である。天井部は丸味をもつものの器形は扁平を呈する。調整は、22～25は天井1/2程度まで回転ヘラケズリを施す。口径10.1～11.3cm、器高2.7～3.7cm。

杯身 (33~54) 形態や成形・調整の特徴、法量の違いから杯身 1 類 (33~37)、杯身 2 類 (38~40, 46, 47)、杯身 3 類 (41~45, 48)、杯身 4 類 (49~54) に分類される。

杯身 1 類 (第67, 77図) 底部はほぼ平坦でゆるやかにカーブして受部にいたる。受部は外斜方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは短く内傾している。調整は、底部はヘラ切り離しの後ナデ、底部中位付近まで回転ヘラケズリの後ナデを施す。内面中央部には一方向の仕上げナデをする。口径10.9~11.4cm、器高3.9~4.1cm。

杯身 2 類 (第67, 77図) 底部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方にのび、U字状に窪み、端部はやや上方を向いて丸くおさめる。たちあがりは内傾してのびて端部を尖り気味に丸くおさめる。調整は、底部の1/3ないし1/2まで回転ヘラケズリを行う。内面中央部は一方向の仕上げナデ。口径11.6~12.8cm、器高3.9~4.4cm。

杯身 3 類 (第67, 77図) 底部はほぼ平坦で、受部までわずかにカーブを描く。受部は外斜方に短くのびて端部を丸くおさめる。たちあがりは、内傾して短くのび、端部を尖り気味に丸くおさめる。調整は、底部は回転ヘラケズリであるが、ヘラケズリの痕跡はほとんどとどめない。内面中央部はいずれも仕上げナデが施されている。口径10.8~11.9cm、器高3.7~4.4cm。

杯身 4 類 (第67, 77図) 底部は丸味をもつが、1~3 類に比べて扁平で小型の器形である。口径9.1~10.0cm、器高2.6~3.4cm。受部はややヨコ方向に開き気味にのび、端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラケズリの後ナデている。

蓋 (28~32, 55~57) 形態的特徴や法量の違いから蓋 1 類 (28~31)、蓋 2 類 (32)、蓋 3 類 (55~57) に分類される。

蓋 1 類 (第66, 76図) 28~31は玄室中央の敷石の上に下向きに4枚が重ねられた状態ではほぼ完形で出土した。口径17.0~18.4cm、器高5.0~5.6cmと大ぶりである。天井部は丸く、乳頭状または扁平な擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。調整は、天井部は概ね回転ヘラケズリを丁寧にし、内面は仕上げナデを施す。かえりはオリコミ手法である。これらの蓋とセットになるような、須恵器は出土しなかった。

蓋 2 類 (第67, 77図) 32は玄室中央東寄りの敷石の下から完形で上向きの状態で出土した。

口径12.4cm、器高3.4cmと蓋 1 類に比して小ぶりである。天井部は丸く、扁平な擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は丸くおさめる。調整は天井部が回転ヘラケズリで内面にはほぼ一方向の仕上げナデを施す。かえりはオリコミ手法である。

蓋 3 類 (第67, 77図) 55は玄室入口やや西寄りの閉塞石直近からほぼ完形で出土した。56は玄室中央入口寄り、57は玄室中央央寄りから出土した。55は口径9.7cm、器高3.5cmで、56は口径11.1cm、器高4.3cm、57は口径11.8cm、器高5.0cmである。したがって55は他に比して小ぶりである。天井部は丸く、ゆるやかにカーブして口縁部にいたる。口縁部は外

斜方に直線的にのび、端部はやや外反し丸くおさめる。調整は、天井部は回転ヘラケズリ、内面中央部は仕上げナデである。

長頸瓶 (58, 59, 86, 87) 形態的特徴から長頸瓶1類 (58), 長頸瓶2類 (59), 長頸瓶3類 (86, 87) に分類される。

長頸瓶1類 (第67, 77図) 58は玄室奥西側の敷石の間から割られた状態で出土した。体部はやや扁平な球体を呈し、口頸部はくの字状に外上方にたちあがり、口縁端部は直立気味にやや内湾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。調整は、底部は回転ヘラケズリを施し、体部中位から上位に間隔をあけ3条の沈線をめぐらし、その間の区画にヘラ状工具で刺突文を施す。頸部中位のやや下に1条の沈線を施す。

長頸瓶2類 (第67, 77図) 59は玄室入口や西寄りの閉塞石直近から押しつぶされたような形で出土した。体部は扁平な球体を呈し、口頸部はくの字状に外上方にまっすぐのび、端部は丸くおさめる。調整は、底部は回転ヘラケズリの後雜なナデ。体部上位と中位の境に1条の凹線がめぐる。

長頸瓶3類 (第69, 79図) 台付長頸瓶で、86は玄室入口西寄り、87は玄室中央西寄りの敷石の下からいずれも完形でヨコに傾いた状態で出土した。体部はやや扁平な球体をなし、口頸部はわずかに外反して直線的にのびて、端部は丸くおさめる。外方へふんばった台脚がつく。調整は、底部は回転ヘラケズリである。87は体部下位にヘラ状工具によって2段の刺突文を施す。体部中位と上位の境に凹線がめぐる。87は、焼成時の台脚部のひずみが著しい。

高杯 形態的特徴や調整面での特徴、法量の違いから高杯1類 (61), 高杯2類 (60, 62), 高杯3類 (63~65), 高杯4類 (66~71), 高杯5類 (72~77), 高杯6類 (78), 高杯7類 (79~83) に分類される。

高杯1類 (第68, 78図) 61は杯部が玄室北西隅で奥壁と敷石の石材に挟まれて、脚部は小片に分かれ、漢道部の閉塞石下や中央付近から出土した。脚部はラッパ状に大きく開き、脚端部は上下に拡張する。杯部は、底部は回転ヘラケズリによって丁寧に仕上げ、口縁外面は回転により明瞭な段を3段つける。透かしは長方形と縦長の台形のものを上下一対、3か所に穿つ。

高杯2類 (第68, 78図) 60, 62は小片に分かれ、漢道部西側から出土した。60, 62は脚部が一旦中位でしまり、ラッパ状に大きく開き、脚端部は上下に拡張される。杯部は、底部はほぼ平坦で、口縁部との境で強く屈曲する。口縁部は外上方にのび、外面は中位に段をめぐらし、上下2段に分け、下段にヘラ状工具によってノの字状の斜線文を施す。脚柱部中位に2条の凹線がめぐる。透かしは長方形と縦長台形のものを上下一対、3か所に穿つ。

高杯3類 (第68, 78図) 63, 64, 65はいずれも玄室中央の敷石の下から出土した。2類に比べて小型である。64は完形品である。脚部は、ラッパ状に大きく開き、脚端部は上下に拡

張する。杯部は、底部は回転ヘラケズリによってほぼ平坦に仕上げ、強く屈曲して口縁部となる。口縁部は外上方にのび、外面中位に段をつける。脚柱部に1条ないし2条の凹線をめぐらす。

高杯4類（第68、78図）66～68、71は玄室中央、69、70は玄室入口寄りから出土した。脚部はラッパ状に開く。脚柱部中位に2条の凹線をめぐらす。66は上下一対、2か所の透かしがあるが、ほかにはない。杯部は底部が丸味をおび、ゆるやかにカーブして口縁にいたる。杯部は底部はヘラケズリを施し、底部と口縁部の境に1条の凹線をめぐらす。

高杯5類（第69、79図）72、73、75は羨道部、74は玄室奥西側の敷石の間、76、77は玄室入口付近から出土した。77は完形品である。焼成時の接合痕跡や色調などから杯蓋1類とセット関係にある。脚部は中位に段をつけ外下方に大きくラッパ状に開く。接地面は平坦である。杯部は、底部はゆるやかにカーブして受部にいたる。受部は外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。杯底部はヘラケズリ、内面は仕上げナデを施す。

高杯6類（第69、79図）78は羨道部西側から出土した。完形品である。脚部はラッパ状に大きく開き、脚端部は上方に拡張する。杯部は浅く、底部が外斜方にゆるやかに広がり、中位に段がつく。口縁部は直立気味に短くのび、端部は丸くおさめる。透かしは継長の台形のものを5か所穿つ。

高杯7類（第69、79図）79、80、82、83は玄室中央の入口寄り、81は玄室中央の敷石の下から出土した。脚部はラッパ状に大きく開く。杯部は、底部はゆるやかにカーブして口縁部にいたる。口縁端部は直立気味に丸くおさめる。杯部は、底部内面は不定方向のナデを施す。

壇（第69、79図）84が1点出土した。口縁部がわずかに欠損しているもののほぼ完形品である。石室中軸線やや西側の玄室中央の敷石下から口縁を上にして出土した。底部は肥厚して丸く、ゆるやかにカーブして体部上位で屈曲して口縁部にいたる。口縁部は内上方に短くのび、端部は丸くおさめる。調整は、底部から体部下位までは回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを行う。

台付椀（第69、79図）85が1点出土した。割れた状態で石室中軸線上の玄室中央の敷石下からほぼかたまって出土した。体部に2条の凹線をめぐらした椀と安定感のある短い台脚とからなる。椀の底部は回転ヘラケズリによる調整の後、台脚と接合している。

聰 形態的特徴や調整方法の違い、法量の違いから聰1類（88）と聰2類（89）、聰3類（90、91）の3類に分けられる。

聰1類（第70、80図）88は玄室中央から出土した。体部は扁平な球体である。頸部はくの字状に大きく外反してのび、口縁部との境に段がつく。口縁部はラッパ状にのびて、端部は丸くおさめる。底部から体部下半はカキ目を施す。体部中位に円形の穿孔がある。体部と頸部の境に沈線がめぐる。口径13.8cm、器高18.2cm。

瓶 2 類 (第70, 80図) 89は玄室中央奥寄りの敷石の間などから出土した。体部はやや梢円の球体をし、頸部は外傾気味にのび、口縁部との境に弱く段がつく。口縁部はラッパ状にのびて、端部は丸くおさめる。底部はヘラ切りの後ナデ。体部中位に円形の穿孔がある。体部中位に1状の凹線がめぐる。口径12.8cm, 器高16.1cm。

瓶 3 類 (第70, 80図) 90, 91は玄室中央西寄りの敷石の下から出土した。90は完形で据えられた状態で出土した。1類・2類に比して小型である。体部は扁平な球体で、頸部は外反してのび、口縁部との境に段がつく。口縁部はラッパ状にのびて、端部は丸くおさめる。

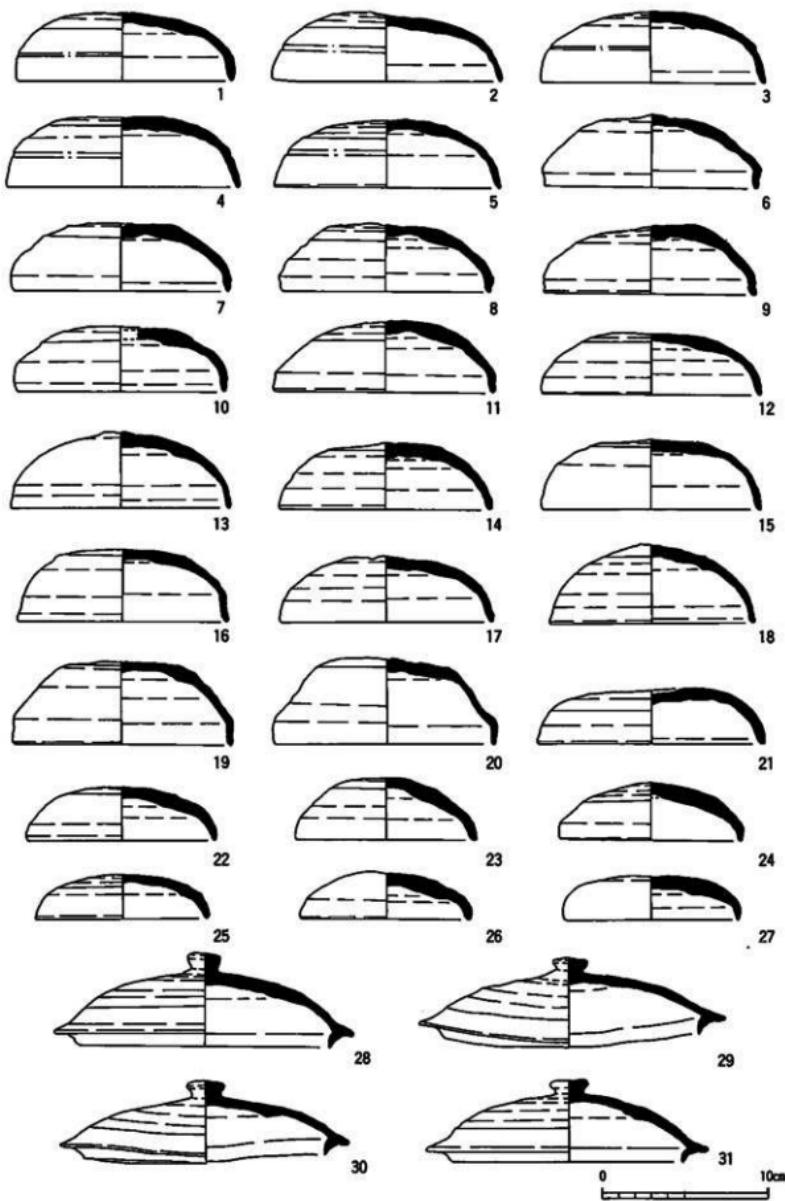
提瓶 形態の特徴や法量の違いから、提瓶1類 (92, 93) と提瓶2類 (94), 提瓶3類 (95~98) の3類に分けられる。

提瓶 1 類 (第70, 80図) 92は玄室入口付近と狭道部閉塞石の下、93は玄室中央の土器床の上に横向きに置かれた状態で出土した。92は細かく割れていた。93は口頸部は欠損するものの体部は完存する。形態は、体部背面のふくらみは少ない。口縁部はくの字状に外上方にのびる。口縁端部は、92についてはやや内傾して尖り気味に丸くおさめる。体部両側の耳は退化していない。調整は、92の体部は前面はカキ目、背面はヘラケズリ。93の体部前面はカキ目の後ヘラ状工具による連続刻目文を放射状に施し、背面はヘラケズリの後カキ目である。

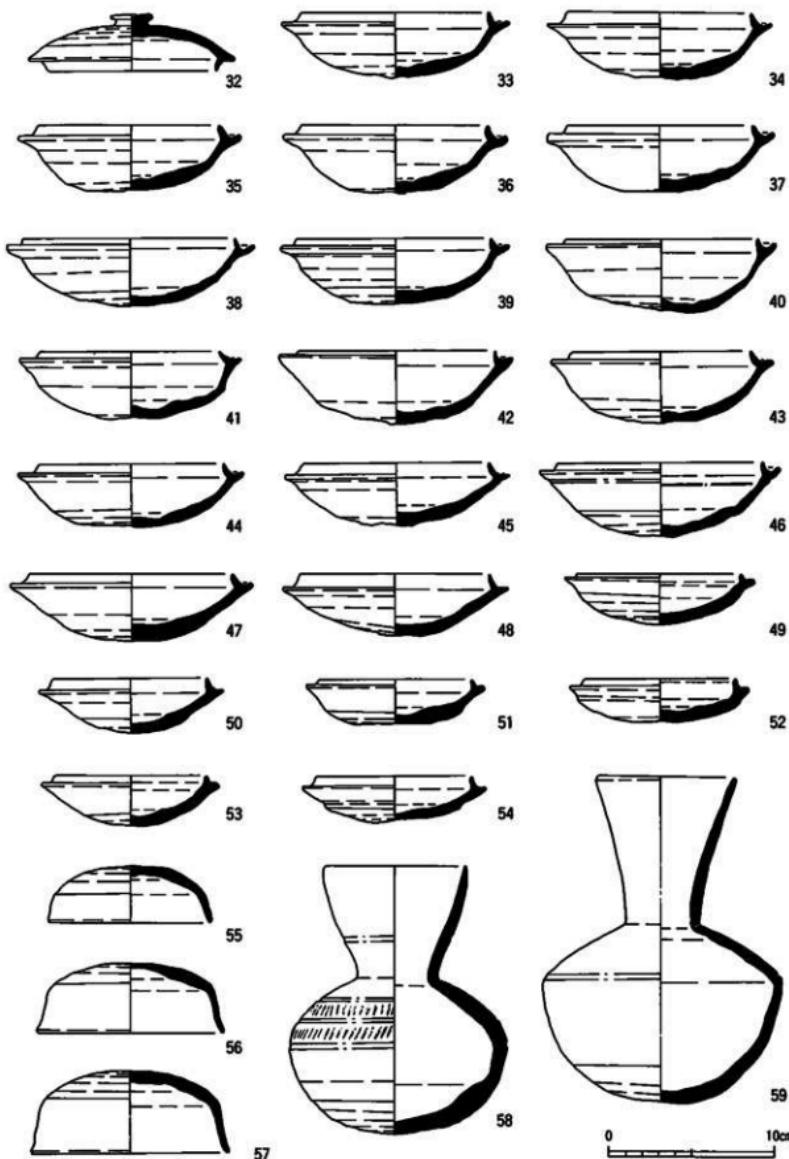
提瓶 2 類 (第71, 80図) 94は狭道部から出土した。1類に比べて小型である。体部は正面は正円形で、側面では梢円形である。口縁部はくの字状に外上方にのび、肩部に角状の粘土塊がつく。体部の調整は、前面がカキ目、背面が丁寧なナデである。

提瓶 3 類 (第71, 80図) 95, 96, 98は玄室中央から、97は玄室入口付近から出土した。いずれも口径4.8~5.4cm, 器高12.8~14.4cmと小型である。体部のふくらみは大きいもの (95, 96) と小さいもの (97), 前面が小さく背面が大きいもの (98) がある。口縁部はくの字状に外上方にのびる。肩部にボタン状の粘土塊がつく。体部の調整は、一方がカキ目で、他方がヘラケズリである。

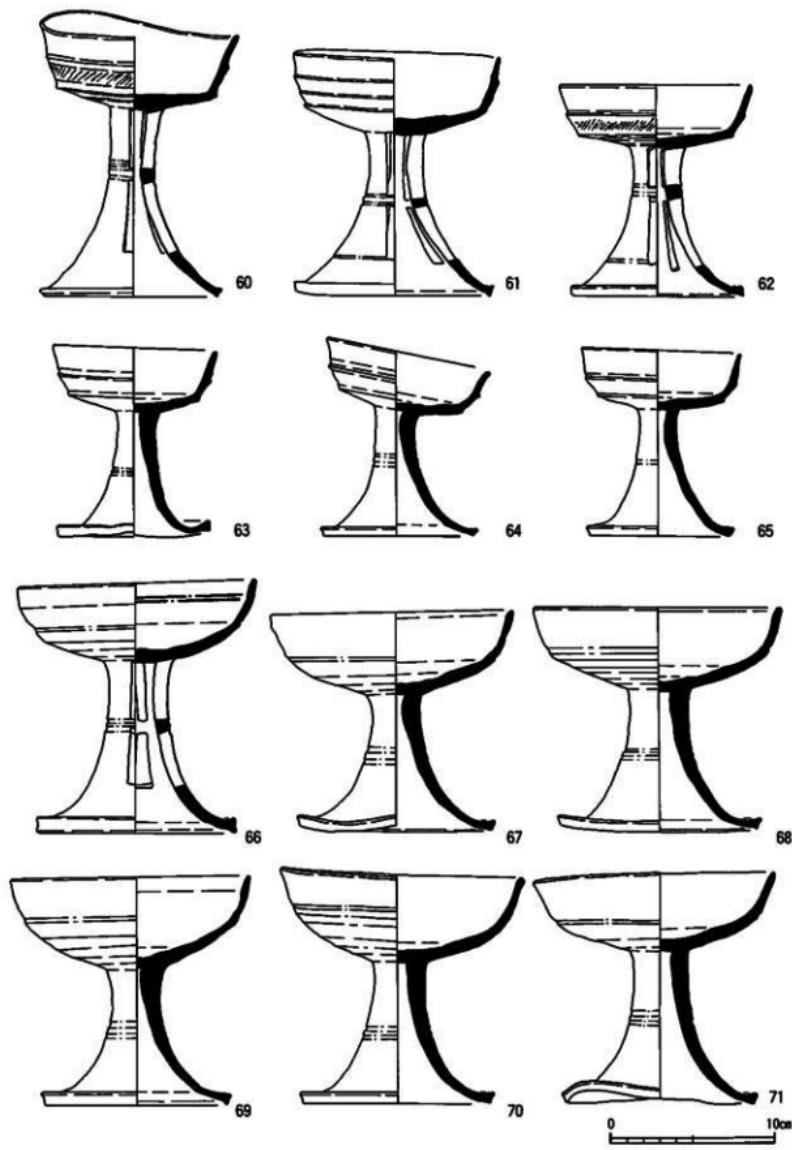
大甕 (第71, 81図) 玄室内から99が1点出土した。石室中軸線の東側の玄室前寄りに土器床として小片に割られ、敷かれていた。口頸部は、くの字状に外反してたちあがり、端部は面をもち、角ばり気味におさめる。体部はゆるやかにカーブして上位で最大径をなし、肩がはる梢円形である。口頸部は水引ロクロ成形による。調整は、口頸部はヘラ状工具によって列線文を3段施し、その後2条ずつの沈線を3段めぐらす。体部内面は同心円のスタンプ文、外面は格子目叩きを施す。口径35.6cm, 器高76.0cm, 体部最大径59.8cm。



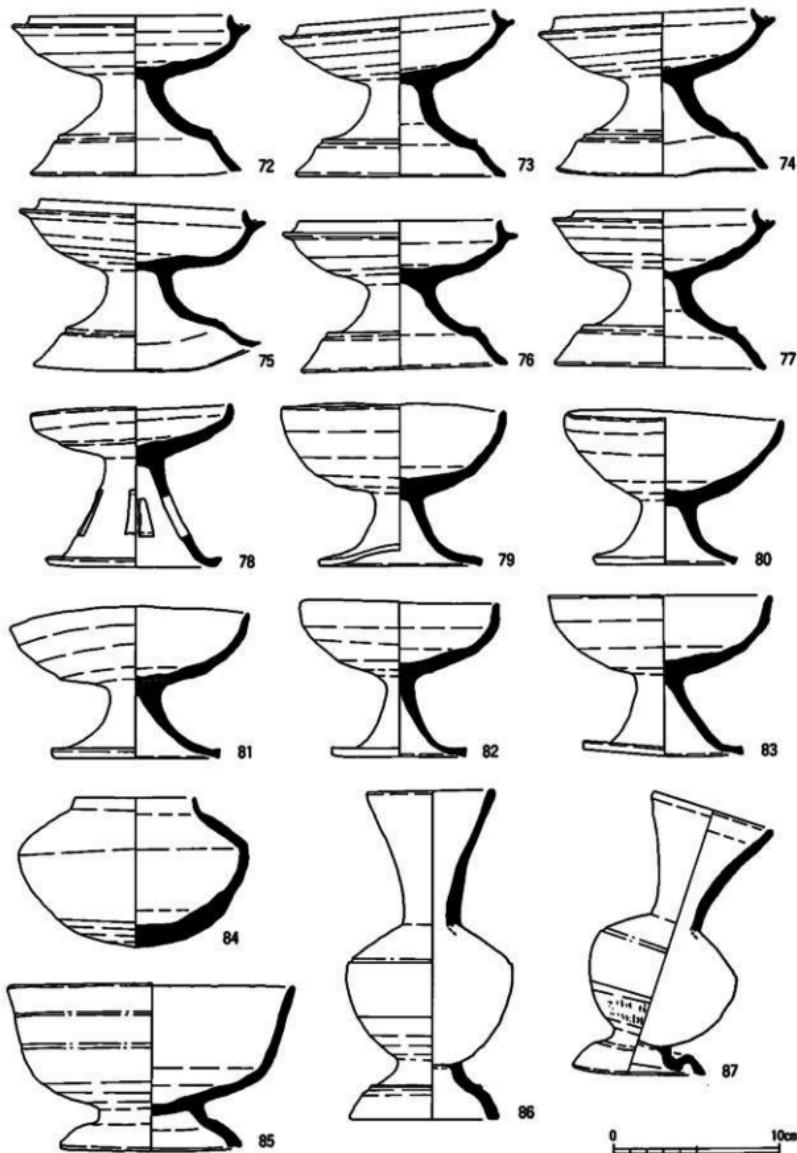
第66図 第2号古墳出土須恵器実測図(1) (1 : 3)



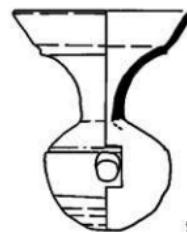
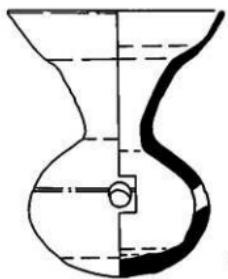
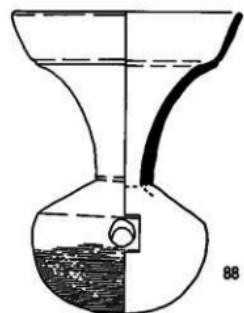
第67図 第2号古墳出土須恵器実測図(2) (1 : 3)



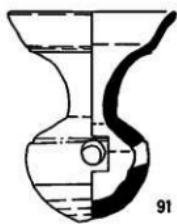
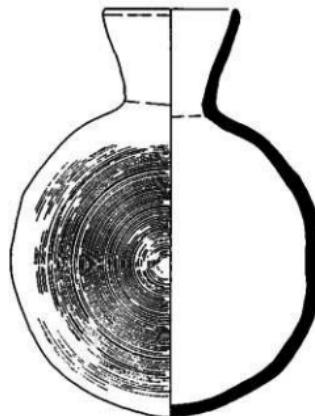
第68圖 第2號古墳出土須惠器実測図(3) (1 : 3)



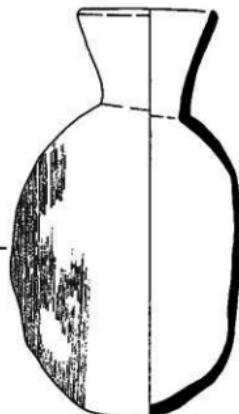
第69図 第2号古墳出土須恵器実測図(4) (1 : 3)



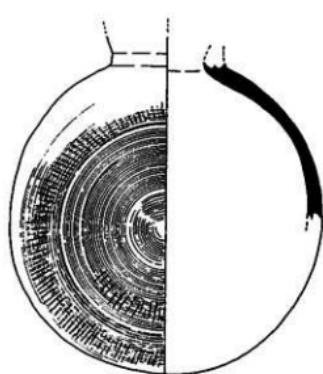
90



91



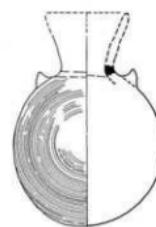
92



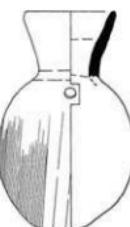
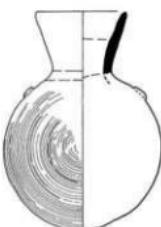
93



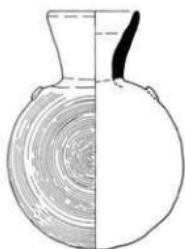
第70圖 第2号古墳出土須恵器実測図(5) (1 : 3)



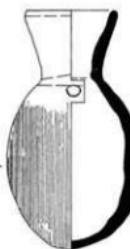
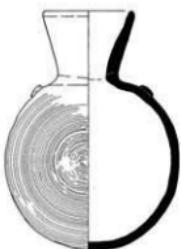
94



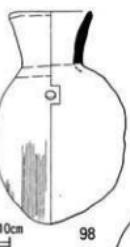
95



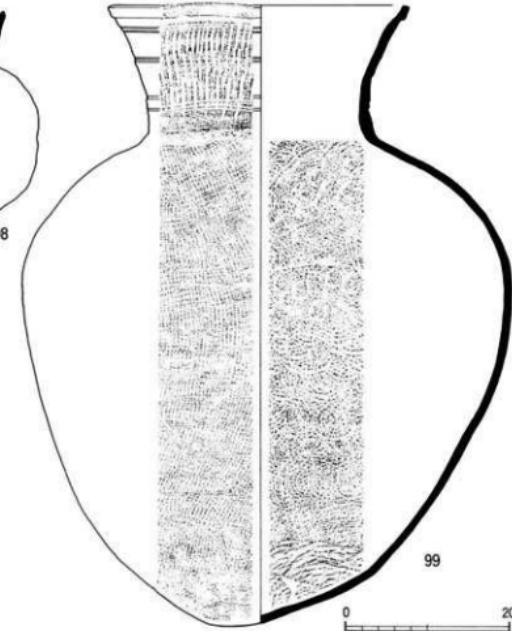
96



97



10cm



99

20cm

第71図 第2号古墳出土須恵器実測図(6) (1:3 1:6)

表1 桩原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
1	杯 罩	口径 高さ 4.0	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁はカーブに面厚し直立気味で、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部1/2まではヘラケズリ。口縁部との境に1条の凹線をめぐらす。内面中央部は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央奥寄 完形品 72とセット
2	杯 罩	口径 高さ 4.0	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁はやや外傾気味で、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部1/2まではヘラケズリ。口縁部との境に1条の凹線をめぐらす。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 やや粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央奥寄 73とセット
3	杯 罩	口径 高さ 4.2	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁はやや外傾気味で、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部1/2まではヘラケズリ。口縁部との境に1条の凹線をめぐらす。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 やや粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央 74とセット
4	杯 罩	口径 高さ 4.2	天井部はほぼ平底で、ゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁はわずかに外傾し端部はやや丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部1/3まではヘラケズリ。口縁部との境に1条の凹線をめぐらす。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 やや粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	後道西側 (閉塞石直近) 75とセット
5	杯 罩	口径 高さ 4.0	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁はわずかに外傾し端部はやや丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部1/2まではヘラケズリ。口縁部との境に1条の凹線をめぐらす。内面中央部はほぼ一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 やや粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	後道 (閉塞石の下) 76とセット
6	杯 罩	口径 高さ 4.3	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描く。口縁部は内傾気味に直立し、天井部との境に後がつく。端部はやや外傾し、丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部はヘラケズリの後継なナダ。内面中央部は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室奥寄 (散石の間)
7	杯 罩	口径 高さ 4.0	天井部はほぼ平底で、ゆるやかにカーブを描く。口縁部は直立気味に直立し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部は1/3付近までヘラケズリの後継なナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室奥寄 (散石の間)
8	杯 罩	口径 高さ 4.0	天井部はほぼ平底で、ゆるやかにカーブを描く。口縁部はわずかに内傾し、天井部との境に後がつく。端部はやや内傾し外傾気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部は1/3までヘラケズリの後継なナダ。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室奥寄 (散石の下) 後道 外面にわずかに自然軸付着
9	杯 罩	口径 高さ 4.1	天井部はほぼ平底で、ゆるやかにカーブを描く。口縁部は直立気味に直立し、端部はわずかに外傾し、丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部はヘラケズリの後ナダつけ。中位までヘラケズリ。内面中央部はほぼ一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室奥寄 (散石の下) 外面にわずかに自然軸付着
10	杯 罩	口径 高さ 3.8	天井部はほぼ平底で、ゆるやかにカーブを描く。口縁部は直立気味に直立し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部は1/3までヘラケズリの後継なナダ。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室奥寄 (散石の下)
11	杯 罩	口径 高さ 4.3	天井部はやや丸く、ゆるやかにカーブを描き、口縁部にいたる。口縁部はわずかに内傾し、天井部との境に後がつく。端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部は1/3までヘラケズリの後継なナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	後道西側 (閉塞石直近) 完形品
12	杯 罩	口径 高さ 3.7	天井部はやや丸く、ゆるやかにカーブを描き、口縁部にいたる。口縁部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部は1/3までヘラケズリの後継なナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明灰色	後道西側 (閉塞石直近) 完形品
13	杯 罩	口径 高さ 4.5	天井部はやや丸く、ゆるやかにカーブを描き、口縁部にいたる。口縁部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後継なナダ。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室奥西側 (散石の上) 完形品 40とセット
14	杯 罩	口径 高さ 4.0	天井部はほぼ平底で、ゆるやかにカーブを描き、口縁部にいたる。口縁部は外傾気味に端部を丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後ナダつけ。内面中央部は一方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室中央西寄 完形品 41とセット

表2 桩原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法 直 (cm)	形態の特徴	底 形・調 整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
15	杯 壺	口径 器高 13.1 4.2	天井部は平坦で、ゆるやかにカーブを描く。口縁部は直立気味で、端部はわずかに外反し、丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後ナデつけ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室中央
16	杯 壺	口径 器高 12.5 4.4	天井部はほぼ平坦で、ゆるやかなカーブを描いて口縁部にいる。口縁部は直立気味で、端部はわずかに外反し、丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後織なナデ。内面中央部は一方向の仕上げナデを施す。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央
17	杯 壺	口径 器高 12.7 4.0	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描き、口縁部にいたる。端部はやや外反気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後織なナデ。内面中央部はほぼ一方向の仕上げナデ。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室奥西側 (歌石の上) 完形品 44+セット
18	杯 壺	口径 器高 12.2 4.8	天井部は丸く、ゆるやかなカーブを描く。口縁部はわずかに外反して、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後ナデつけ。内面中央部はほぼ一方向の仕上げナデ。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央 完形品
19	杯 壺	口径 器高 13.1 5.0	天井部は平坦で、わずかにカーブをして口縁部にいる。口縁部は直立し、端部はわずかに外反し丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部はヘラケズリの後織なナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡音灰色	玄室中央 完形品
20	杯 壺	口径 器高 13.3 5.2	天井部は平坦で、ゆるやかなカーブを描き、口縁部にいたる。口縁部はわずかに内傾し天井部との境に後がつく。端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井頂部はヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡音灰色	玄室中央 外面に自然軸付着
21	杯 壺	口径 器高 13.4 3.3	天井部は広く平坦で中央部はわずかに窪む。ゆるやかなカーブを描き、口縁部はやや外傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部は1/2までにはヘラケズリの後織なナデ。内面中央部はほぼ一方向の仕上げナデ。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室中央奥寄り 完形品
22	杯 壺	口径 器高 11.3 3.2	天井部はやや丸く、ゆるやかにカーブを描く。口縁部はわずかに外傾し、天井部との境に後をなす。端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部上位はヘラケズリ。内面中央部は不定方向の仕上げナデ。	胎土 微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	後造西側 (明石石直近) 完形品
23	杯 壺	口径 器高 10.9 3.7	天井部はほぼ平坦で、ゆるやかにカーブする。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部は1/3付近までヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室奥中央 (歌石の上) 完形品
24	杯 壺	口径 器高 10.9 3.4	天井部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部は1/2までヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室中央 完形品
25	杯 壺	口径 器高 10.2 2.7	天井部は扁平気味である。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部は1/2までヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明灰色	玄室奥 (樋邊埴土中) 完形品
26	杯 壺	口径 器高 10.1 2.8	天井部はやや丸く、ゆるやかなカーブを描く。口縁部は肥厚し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後丁寧なナデ。内面中央部は一方向の仕上げナデ。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	後造西側 (明石石直近) 完形品
27	杯 壺	口径 器高 10.4 2.7	天井部は丸く、乳頭状のつまみがつく。口縁部は外下方にのみ、かえりは内傾し、端部はやや尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後織なナデ。内面中央部は不定方向の仕上げナデ。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 淡明灰色	後造 (明石石の下) 完形品
28	壺	口径 器高 18.0 5.6	天井部は丸く、乳頭状のつまみがつく。口縁部は外下方にのみ、かえりは内傾し、端部はやや尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形による。天井部はヘラケズリ。内面中央部は一定方向の仕上げナデ。かえりはオリコミ法。ロクロは成形時は時計回り、調整時は反時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡灰褐色 (内面 淡明 青灰色)	玄室奥中央 (歌石の上) (歌石の間)
29	壺	口径 器高 18.4 5.3	わずかにひずむが。天井部は丸く、扁平な擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は外下方にのみ、かえりは内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリ。内面中央部は一定方向の仕上げナデ。かえりはオリコミ法。ロクロは成形時は時計回り、調整時は反時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 淡灰褐色 (内面 淡明 青灰色)	玄室奥中央 (歌石の上) 完形品 頂部にわずかに自然軸付着

表3 梁原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特色	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
30	蓋	口径 17.5 器高 5.0	わざかにひずむが、天井部は丸く、幾宝珠状のつまみがつく。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリ、内面中央部は一方向の仕上げナデ。かえりはオリコミ法。ロクロは成形時は時計回り、調整時は反時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡灰褐色 (内面) 淡明灰褐色	玄室奥中央 (鑿石の上) 完形品 頂部にわずかに自然釉付着
31	蓋	口径 17.0 器高 5.0	天井部は丸く、扁平な幾宝珠状のつまみがつく。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリ、内面中央部は不定方向の仕上げナデ。かえりはオリコミ法。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室奥中央 (鑿石の上) 完形品
32	蓋	口径 12.4 器高 3.4	天井部は丸く、扁平な幾宝珠状のつまみがつく。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリ、内面中央部はぼ一方向の仕上げナデ。かえりはオリコミ法。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 乳灰色	玄室中央 完形品
33	杯身	口径 11.4 器高 4.0	底部はほぼ平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部を丸くおさめる。たちあがりは内傾してわずかにのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は一部は一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室中央 (鑿石の下)
34	杯身	口径 11.2 器高 4.0	底部は平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部を丸くおさめる。たちあがりは内傾してわずかにのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は部分的に仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室奥中央 (鑿石の上) 完形品 外面にわずかに自然釉付着
35	杯身	口径 10.9 器高 3.9	底部は平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外上方に短くのび、端部を丸くおさめる。たちあがりは内傾して直線的にのび、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室奥中央 (鑿石の間) 完形品 外面にわずかに自然釉付着
36	杯身	口径 11.3 器高 4.1	底部は平坦で、ゆるやかなカーブを描く。受部は外斜方に短くのび、端部を丸くおさめる。たちあがりは内上方に直線的にのび、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室奥東側 (鑿石の下) 完形品 外面に自然釉付着
37	杯身	口径 11.2 器高 3.9	底部は平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外上方に短くのび、端部は部分的に肥厚するものの丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部はぼ一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室奥 (鑿石の下) 外面に自然釉付着
38	杯身	口径 12.8 器高 4.1	底部は平坦で、ゆるやかなカーブを描く。受部は外上方に短くのび、U字状に深く盛み端部を丸くおさめる。たちあがりは内傾して直線的にのび、端部は尖り気味に丸い。	マキアゲ水引成形。底部は1/3までヘラケズリ。内面中央部は一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央
39	杯身	口径 11.8 器高 3.9	底部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、受部外面には沈締が1条めぐり、端部は丸くおさめる。たちあがりは内上方に短くのび、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部下半はヘラケズリ。内面中央部はぼ一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室中央 完形品
40	杯身	口径 11.6 器高 4.4	底部は平坦で、ゆるやかにカーブする。受部はわずかに外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部は1/3まではヘラケズリ。内面中央部はぼ一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡青灰色	玄室奥西側 (鑿石の上) 完形品 13とセット
41	杯身	口径 10.8 器高 4.0	底部はほぼ平坦で、ゆるやかにカーブする。受部はわずかに外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリ。内面中央部は一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室中央西寄り 完形品 14とセット

表4 桩原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特色	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
42	杯 身	口径 器高 11.9 4.4	底部はほぼ平坦で、わずかに外上方にカーブして受部にいたる。端部は丸くおさめる。たちあがりは上方にうすくほぼ直立し、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリ。内面中央部は一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室入口付近
43	杯 身	口径 器高 10.8 4.3	底部はわざかに平坦で、受部までゆるやかなカーブを描く。たちあがりは内傾してのび、端部を丸くおさめる。受部は短く外上方にのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央
44	杯 身	口径 器高 11.1 3.8	底部はほぼ平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内傾してのび、端部は尖り気味に丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部はほぼ一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡青灰色	玄室奥西寄り (散石の上) 完形品 17+セッタ
45	杯 身	口径 器高 11.2 3.8	底部はほぼ平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデつけ。内面中央部はほぼ一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央西寄り 完形品
46	杯 身	口径 器高 12.4 4.4	底部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。受部は外上方に短くのび、U字形に深く窪む。底部との境に沈線がめぐる。端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後短いナデ。内面中央部は一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡青灰色	玄室中央 完形品
47	杯 身	口径 器高 12.3 4.1	底部は肥厚し、やや丸く、わずかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は尖り気味に丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央奥寄り
48	杯 身	口径 器高 11.4 3.7	底部はほぼ平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は尖り気味で丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデつけ。内面中央部は一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央西側 (散石の上) 完形品
49	杯 身	口径 器高 10.0 3.1	底部は丸く、ゆるやかにカーブを描く。受部は部分的に肥厚するものの外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部は2/3までヘラケズリの後ナデ。内面中央部は不定方向の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 狭道 (閉塞石の下)
50	杯 身	口径 器高 9.2 3.4	底部は丸く、ゆるやかにカーブする。受部は肥厚し外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部は1/3までヘラケズリの後ナデ。クロロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央奥寄り (散石の下)
51	杯 身	口径 器高 9.2 2.7	底部は広く平坦で、ゆるやかにカーブする。受部は肥厚し外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりはほぼ直立気味にのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。内面中央部は一方の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	狭道西側 (閉塞石直近)
52	杯 身	口径 器高 9.1 2.6	底部はわざかに丸く、ゆるやかにカーブするが、受部にかけて強く外反する。受部は肥厚し、外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは直立気味にのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後丁寧なナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室奥西側 (散石の間)
53	杯 身	口径 器高 9.2 3.0	底部は丸く、ゆるやかにカーブして受部にいたる。受部は肥厚し外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは直立気味で端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部は1/3までヘラケズリの後ナデつけ。内面中央部は不定方向の仕上げナデ。クロロは時計回り。	胎土 微妙粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡明灰色	玄室中央 完形品

表5 梶原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特色	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
54	杯身	口径 9.3 器高 2.7	底部はほんく、ゆるやかにカーブする。受部との境に凹状の瘤をめぐらし、縁をつける。瘤部は丸い。中位には直立気味で瘤部はわずかに外崩し丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部は1/2までヘラケズリ。内面中央部はほん一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 焼成 色調	埴西側 (開高石の下) 完品
55	蓋	口径 9.7 器高 3.5	天井部はややく、ゆるやかにカーブ。口縁部は外崩し、瘤部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリの後ナデつけ。内面中央部はほん一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 多く含む 焼成 色調	玄室入口西寄り (開高石直近)
56	蓋	口径 11.1 器高 4.3	天井部はわずかに丸く、ゆるやかにカーブし、口縁部は外崩方に直立気味のび、瘤部はやや外反し丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリ。内面中央部は不定方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 含む 焼成 色調	玄室中央
57	蓋	口径 11.8 器高 5.0	天井部は丸く、ゆるやかにカーブし、口縁部はわずかに外崩方に直立気味のび、瘤部はやや外反し丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部はヘラケズリ。内面中央部は不定方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 含む 焼成 色調	玄室中央奥寄り (歌石の下)
58	長頸瓶	口径 8.6 器高 16.2	体部はやや扁平な球体をなし中位から上位にかけて3条の沈線をめぐらす。頸部は外反してたらあがり、中位から口縁部は直立気味にわずかに内済し、瘤部は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリ。沈線の間はヘラ形状工具による刺突。頸部中位のやや下に1条の沈線を施す。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 多く含む 焼成 色調	玄室奥西側 (歌石の間) 外面に自然物がわずかに付着
59	長頸瓶	口径 8.3 器高 19.7	体部は扁平な球体を呈し、口縁部はくの字状に外上方にまぐらにのび、瘤部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後ナデ。体部上位と中位の境に1条の凹線をめぐらす。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 含む 焼成 色調	玄室入口中央 (開高石直近) 外面・口縁部 外面にわずかに自然物付着
60	高杯	口径 12.1 器高 16.7	脚部は中位で一旦しまり、ラッパ状に大きく開き、脚部は上下に笠張される。口縁部は底盤に丸くおさめる。底盤は平坦である。口縁部は外上方にのび、中位に凹線がある。瘤部はやや外済気味に丸く。杯部にひずみがある。透かしは長方形と縱長台形のものを上下一对、3ヶ所に穿つ。	マキアゲ水引成形。杯部は底盤は2条の凹線をめぐらし、その間にヘラ状工具によるノリの字状の斜削痕を出す。口縁部は下位にヘラ状工具による斜削痕。底部内面に不定方向の仕上げナデ。脚部中位に2条の凹線をめぐらす。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 含む 焼成 色調	埴西側 (開高石直近) 杯部内面にわざかに自然物付着
61	高杯	口径 12.6 器高 14.8	脚部はラッパ状に大きく開き、脚部は上下に笠張される。口縁部は回転により3枚の段をつける。瘤部は丸い。透かしは長方形と縱長台形のものを上下一对、3ヶ所に穿つ。	マキアゲ水引成形。杯部は底盤はヘラケズリ。口縁部下位にヘラ状工具による斜削痕。底部内面に不定方向の仕上げナデ。脚部中位に2条、下位に1条の凹線をめぐらす。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 色調	玄室北西隅 (歌石の間) 疾道
62	高杯	口径 (11.5) 器高 12.9	脚部は中位で一旦しまり、ラッパ状に大きく開く。脚部は上下に笠張される。杯部は底盤はほぼ平坦で、口縁部は外上方にのびる。中位に凹線がある。瘤部は丸い。透かしは長方形と縱長台形のものを上下一对、3ヶ所に穿つ。	マキアゲ水引成形。杯部は底盤はヘラケズリ。口縁部下位にヘラ状工具による斜削痕。底部内面に不定方向の仕上げナデ。脚部中位に4枚線が1条めぐる。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 色調	埴西側
63	高杯	口径 9.9 器高 11.5	脚部は中位で一旦しまり、ラッパ状に大きく開く。脚部は上下に笠張される。杯部は底盤はほぼ平坦で、口縁部は外上方にのびる。中位に突起状の段がつる。瘤部は外反気味に丸くおさめる。ひずみがある。	マキアゲ水引成形。杯部は底盤はヘラケズリ。底部内面に不定方向の仕上げナデ。脚部中位に凹線が1条めぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 多く含む 焼成 色調	玄室中央 脚部にひずみがある
64	高杯	口径 10.0 器高 11.2	脚部は中位で一旦しまり、ラッパ状に大きく開く。脚部は底盤は底盤はほぼ平坦で、口縁部は外上方にのびる。中位に突起状の段がつる。瘤部は外反気味に丸くおさめる。ひずみがある。	マキアゲ水引成形。杯部は底盤はヘラケズリ。底部内面にほん一方向の仕上げナデ。脚部中位に凹線が2条めぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 含む 焼成 色調	玄室中央 完品

表6 桩原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
65	高杯	口径 9.6 器高 11.3	脚部はラッパ状に大きく聞く。脚端部は上方に延張する。杯部は底部はほぼ平坦。口縁部は外上方にのび、中位に段がつく。端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部内面はほぼ一方に向の仕上げナデ。脚柱部中位に凹縫が1条めぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央
66	高杯	口径 14.4 器高 15.1	脚部はラッパ状に大きく聞く。脚端部は上方に延張する。杯部は底部はゆるやかにカーブし口縁にいたる。端部はやや外湾気味に丸くおさめる。透かしは長方形と縱長舌形のもの上を下一つ、2ヶ所に際つて。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部と口縁部の境に四線を施す。口縁部に2条の沈縫がめぐり、底部内面は不定方向の仕上げナデ。脚柱部中位に凹縫が2条めぐる。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明灰白色	玄室中央
67	高杯	口径 14.7 器高 13.2	脚部はラッパ状に大きく聞く。脚端部は上方に延張する。杯部は底部はゆるやかにカーブし口縁にいたる。端部はやや外湾気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部と口縁部の境に四線を施す。底部内面は一方に向の仕上げナデ。脚柱部中位に2条の凹縫がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を多く含む 焼成 良好 淡明灰白色	玄室中央
68	高杯	口径 14.9 器高 13.7	脚部はラッパ状に大きく聞く。脚端部は上方に延張する。杯部は底部はゆるやかにカーブし口縁にいたる。端部はわざかに外湾しみる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部と口縁部の境に四線を施す。底部内面は不定方向の仕上げナデ。脚柱部中位に2条の凹縫がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を多く含む 焼成 良好 淡明灰白色	玄室中央
69	高杯	口径 14.4 器高 13.9	脚部は中位で一旦しまし。ラッパ状に大きく聞く。脚端部は下方に延張する。杯部は底部はゆるやかにカーブする。口縁部は外上方にのび、端部は外湾気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部と口縁部の境に四線を施す。底部内面は一方に向の仕上げナデ。脚柱部中位に2条の凹縫がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を含む 焼成 良好 淡明灰褐色	玄室中央 (入口寄り)
70	高杯	口径 14.9 器高 13.9	脚部はラッパ状に大きく聞く。脚端部は上方に延張する。杯部は底部はゆるやかにカーブする。口縁部は外上方にのび、端部は外湾気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部と口縁部の境に四線を施す。底部内面は不定方向の仕上げナデ。脚柱部中位に2条の凹縫がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を多 く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央 (入口寄り、 奥寄り)
71	高杯	口径 14.8 器高 14.0	脚部はラッパ状に大きく聞く。脚端部は上方に延張する。杯部は底部はゆるやかにカーブする。口縁部は外上方にのび、端部は外湾気味に丸くおさめる。端部にひずみがある。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部と口縁部の境に四線を施す。底部内面は一方に向の仕上げナデ。脚柱部中位に2条の凹縫がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を多く含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央
72	高杯	口径 12.1 器高 9.5	脚部は中位に段がつき。外方へ大きく聞く。杯部は底部はゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは厚肥厚し、端部は直立気味に丸い。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部内面はほぼ一方に向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を含む 焼成 良好 淡明青灰色	表道 1とセット
73	高杯	口径 11.8 器高 9.5	脚部は中位に段がつき。外方へ大きく聞く。杯部は底部はゆるやかにカーブを描く。受部は外斜方に短くのび、端部は丸くおさめる。たちあがりは内斜方にのび、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部内面は一方に向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色 ～淡青灰色	表道 2とセット 外間にわざかに自然軸付着
74	高杯	口径 11.9 器高 9.8	脚部は中位に段がつき。外方へ大きく聞く。杯部は底部はゆるやかにカーブし、受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内斜方にのび、端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部内面は不定方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を含む 焼成 良好 淡明青灰色 ～淡青灰色	玄室奥西側 (散石の間) 3とセット
75	高杯	口径 12.3 器高 9.9	脚部は中位に段がつき。外方へ大きく聞く。杯部は底部はゆるやかにカーブし、受部は外斜方に短くのび、端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はヘラケズリ。底部内面は不定方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒 を含む 焼成 良好 淡明青灰色 ～淡青灰色	表道 (閉塞石の下) 4とセット 端部にひずみ がある

表7 植原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
76	高杯	口径 12.2 器高 9.0	脚部は中位に段をつけ、外方に大きく開く。杯部は底部はゆるやかにカーブする。受部はほぼヨコ方向に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内上方にのみ、端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はへラケズリ。底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色～淡青灰色～淡灰褐色	玄室入口 5とセット
77	高杯	口径 11.0 器高 9.3	脚部は中位に段をつけ、外方に大きく開く。杯部は底部はゆるやかにカーブする。受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内上方にのみ、端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部はへラケズリ。底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色～淡青灰色	玄室入口 (南窓石直近) 完形品
78	高杯	口径 11.9 器高 9.5	脚部はラッパ状に大きく開く。脚部は上方に笠張る。杯部は底部はゆるやかに立ち気味に段がつく。口縁部は直立気味に短くのび、端部は丸くおさめる。造かれは銀錠台形のものか所存つ。	マキアゲ水引成形。杯部は底部内面は一方方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡灰褐色～暗灰色	後退西側 (南窓石直近) 完形品 わずかに自然 軸付着
79	高杯	口径 13.4 器高 9.6	脚部はラッパ状に大きく開く。脚部は下方に笠張る。杯部は底部はゆるやかにカーブして口縁にいたる。端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 不良 色調 乳灰色	玄室中央 (入口寄り) ひずみがある
80	高杯	口径 12.9 器高 9.1	脚部はラッパ状に大きく開く。脚部は上方に笠張る。杯部は底部はゆるやかにカーブして口縁にいたる。端部はゆるく内湾して丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 (入口寄り)
81	高杯	口径 14.3 器高 9.1	脚部はラッパ状に大きく開く。脚部は上方に笠張る。杯部は底部はゆるやかにカーブする。口縁部は外上方にのみ、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 杯部にひずみ がある
82	高杯	口径 11.8 器高 9.3	脚部はラッパ状に大きく開く。脚部は下方に笠張る。杯部は底部はゆるやかにカーブする。口縁部はほぼ直立し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 不良 色調 乳灰色	玄室入口
83	高杯	口径 13.4 器高 9.7	脚部はラッパ状に大きく開く。脚部は上方に笠張る。杯部は底部はゆるやかにカーブする。口縁部は直立し、端部は外気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。杯部は底部内面は不定方向の仕上げナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 不良 色調 乳灰色～暗灰色	玄室入口寄り 脚部にひずみ がある
84	塔	口径 7.2 器高 9.0	底部は肥厚し、丸味をもつ。ゆるやかにカーブして体部上位に最大径をもち、底部からなるく屈曲して口縁部にいたる。口縁部は外斜方にのみ、端部は丸く内上方にたちあがる。端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部から体部下位はへラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 不良 色調 乳灰色～暗灰色	玄室中央西寄り
85	台付鏡	口径 17.2 底径 11.0 器高 10.1	底部は外方へふんばった台脚がつく。底部からなるく屈曲して口縁部にいたる。口縁部は外斜方にのみ、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部はへラケズリ。体部上位に四線をめぐらす。高台は中位に実線を施し、段をつける。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 (鏡石の下)
86	長頸瓶	口径 7.6 器高 19.9	体部はやや扁平な球体をなす。口縁部は直立気味に上方にのみ、端部は丸くおさめる。底部は外方へふんばった高台がつく。	マキアゲ水引成形。底部はへラケズリ。体部上位に四線をめぐらす。高台は中位に実線を施し、段をつける。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡青灰色	玄室入口西寄り
87	長頸瓶	口径 7.5 器高 17.1	体部はやや扁平な球体をなす。口縁部は直立気味に上方にのみ、端部は丸くおさめる。底部は外方へふんばった高台がつくが、ひずみで器形は傾く。	マキアゲ水引成形。底部はへラケズリ。ちへら状工具により、2段の利突をめぐらす。体部上位に四線を施す。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡青灰色	玄室中央西寄り

表8 梶原第2号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
88	瓶	口径 器高 13.8 16.2	体部は扁平の球体をなす。頸部は大きく外反気味にのび、口縁部との境に段をつける。口縁部はラップ状にのびて、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底盤から体部下半はカキ目。体部中位に円形の穿孔がある。体部と頸部の境に凹線がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡青灰色	玄室中央 完形品
89	瓶	口径 器高 12.8 16.1	体部はやや指円の球体をなす。頸部は外反気味にのび、口縁部との境に弱く後がつく。口縁部はラップ状にのびて、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底盤はへラ切りの後ナデ。体部中位に円形の穿孔がある。体部中位に1条の凹線がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 淡灰褐色	玄室中央奥寄り (鉄石の間)
90	瓶	口径 器高 10.7 13.3	体部は扁平な球体をなす。頸部は外反して、口縁部との境に段をつける。口縁部はラップ状にのびて、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底盤から体部下位はヘラケズリ。体部中位に円形の穿孔がある。体部上位と中位の境に凹線を施す。ロクロは反時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央西寄り 完形品
91	瓶	口径 器高 9.8 12.8	体部は扁平な球体をなす。頸部は外反して、口縁部との境に段をつける。口縁部はラップ状にのびて、端部は外反気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底盤から体部下位はヘラケズリ。体部中位に円形の穿孔がある。体部上位と中位の境に凹線を施す。ロクロは反時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央西寄り
92	提瓶	口径 器高 8.0 24.5	体部は正円形で、前面は丸味をもつが、背面は扁平である。口縁部はくの字状に外方にのび、端部はやや内傾して尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目。背面はヘラケズリ。ロクロは反時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色～明灰褐色	玄室入口 渡道 (閉塞石の下)
93	提瓶		体部は正円形で、前面は丸いが、背面のふくらみはすくない。口縁部はくの字状に外方にのびる。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目のちらせ工具による逐級削り目。背面はヘラケズリの後カキ目。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央
94	提瓶		体部は正円形で、前・背両面とも均等に丸味をもつ。口縁部はくの字状に外方にのびる。肩部に角状の粘土塊がつく。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目調整。背面は丁寧なナダ。ロクロは時計回り。	胎土 微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	渡道西側 (閉塞石直近)
95	提瓶	口径 器高 5.4 13.2	体部は正円形で、背面のふくらみは大きい。口縁部は外方にのび、端部はやや内傾して尖り気味に丸い。肩部にボタン状の粘土塊がつく。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目調整。背面はヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 完形品
96	提瓶	口径 器高 5.3 14.4	体部は正円形で、前・背両面ともほのぼ地等で丸味をもつ。口縁部はくの字状に外方にのび、端部は内縮気味に丸い。肩部にボタン状の粘土塊がつく。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目調整。背面はヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央
97	提瓶	口径 器高 5.2 14.4	体部は正円形で、前・背両面ともふくらみはすくない。口縁部はくの字状に外方にのび、端部は内縮気味に丸い。肩部にボタン状の粘土塊がつく。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目調整。背面はヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室入口
98	提瓶	口径 器高 4.8 12.8	体部は正円形で、前面のふくらみはすくない。口縁部はくの字状に外方にのび、端部は尖り気味に丸い。肩部にボタン状の粘土塊がつく。	マキアゲ水引成形。体部は前面はカキ目調整。背面はヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 完形品
99	大甕	口径 器高 35.6 76.0	口縁部はやや外反してたらちあがり、端部外面に面をもち、角ばり気味におさめる。体部は最大径が上位にくる肩部の振る指円形である。	口縁部外面はヘラ状工具の列線文を施し、2条の沈線を3段めぐらす。体部内面は同心円のスタンプ文。外面は格子目叩き。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 乳灰色	玄室土器床

第3号古墳からは、杯蓋2点（第72図100, 101）、杯身2点（第72図102, 103）、高杯6点（第72図104, 105, 108~111）、蓋1点（第72図106）、壺1点（第72図107）、平瓶1点（第72図112）、聰2点（第72図113, 114）、提瓶4点（第72図115, 第73図116~118）、杯1点（第73図119）がある。

杯蓋（第72, 81図） いずれも玄室内埋土中から口縁部の破片が出土した。100は直立し、尖り気味に丸くおさめる。101は、天井部はやや丸い。かえりは直立し尖り気味におさめる。調整は、天井部は広く回転ヘラケズリを施す。

杯身（第72図） 102は墳裾から、103は墳裾・玄室埋土中から出土した。いずれも口縁端部がわずかに断片として残存する。

高杯（第72, 81図） いずれも玄室中央付近から出土した。104, 105は高杯の杯部である。104は受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内傾し、端部は直立気味に丸くおさめる。透かしを穿った痕跡がある。105は口縁端部は直立気味に丸くおさめる。脚柱部は細い。108~111は高杯の脚部である。109~111は108に比べて小型である。

蓋（第72図） 玄室内から口縁部がわずかな断片として出土した。口縁端部は内斜方にまがり、端部は尖り気味におさめる。

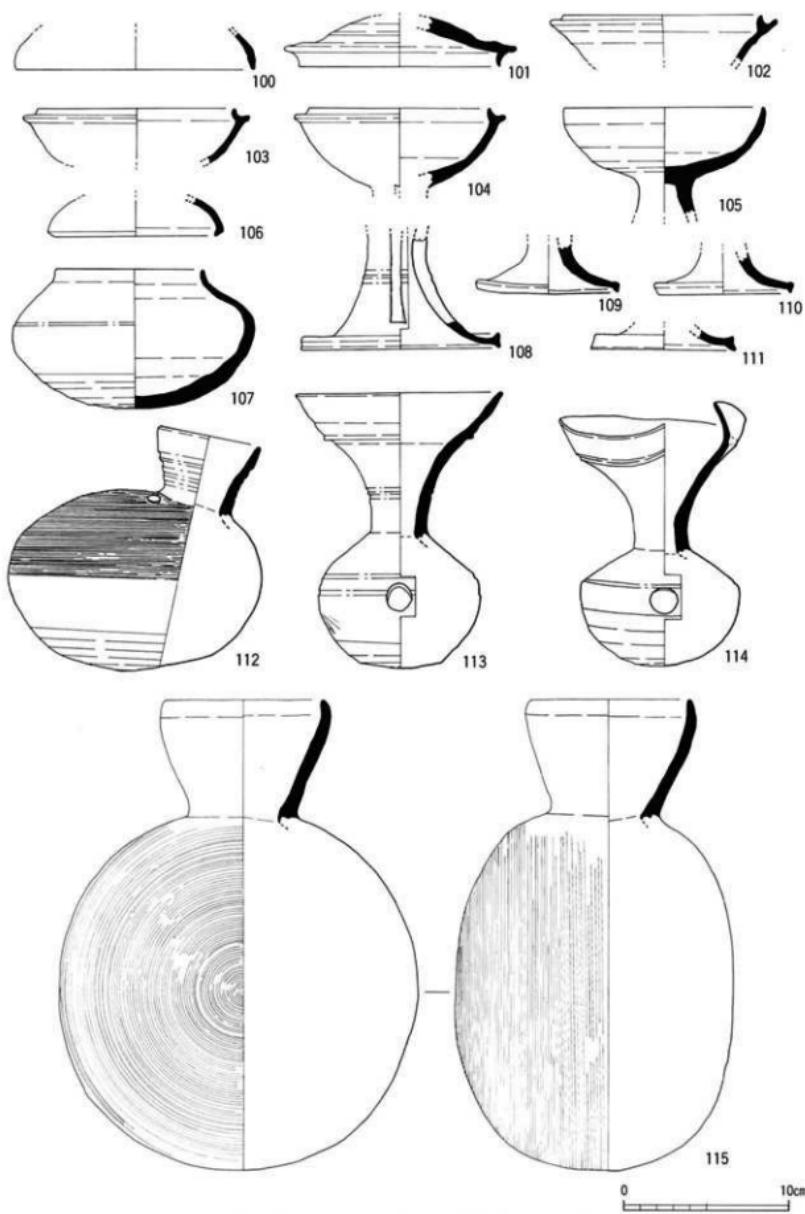
壺（第72, 81図） 玄室中央で細かく割れた状態で出土した。底部は丸く、ゆるやかにカーブして体部上位に最大径をもち、にくく屈曲して口縁部にいたる。口縁部は短く内上方にのび、端部は丸くおさめる。調整は、底部は回転ヘラケズリ、最大径付近に1条の凹線がめぐる。内面中央部は仕上げナデを施す。

平瓶（第72, 81図） 玄室中央から完形で出土した。体部はやや扁平な指円形で、口縁部は外上方に開き、壠部を丸くおさめる。肩部に2か所ボタン状の粘土塊をつける。調整は、底部から体部下位は回転ヘラケズリ。体部中位から上位はカキ目。口縁部は接合前に数条の凹線をめぐらす。ロクロの回転は反時計回り。

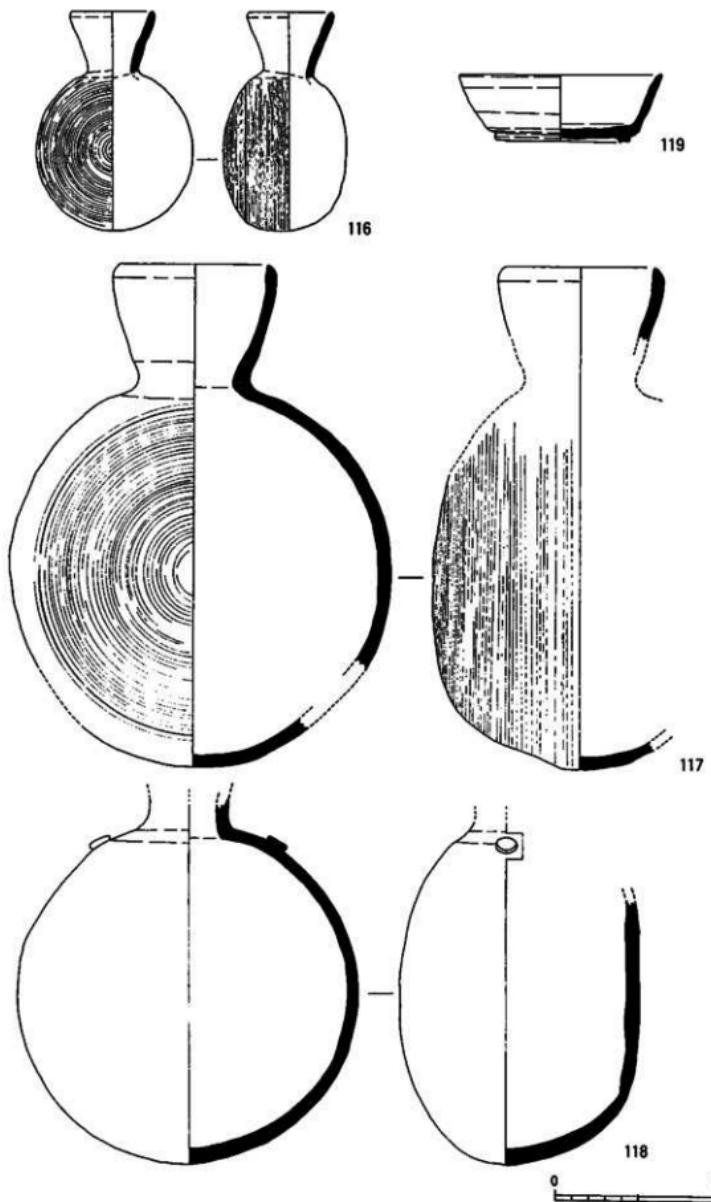
聰（第72, 81図） いずれも玄室中央から完形で出土した。体部は扁平な球体をなし、頸部は外反して、口縁部との境に段をつける。114は焼成時のひずみが大きい。調整は、底部から体部下位は回転ヘラケズリ。体部中位に円形の穿孔がある。

提瓶（第72, 73, 81, 82図） 115・117・118は大型で、116は小型である。115・116は玄室中央から完形で出土した。117は墳丘上から、118は閉塞石内から出土した。体部はいずれも正円形である。118は肩部にボタン状の粘土塊がつく。調整は前面はいずれもカキ目であるが、背面は115~117は回転ヘラケズリの後カキ目、118は回転ヘラケズリ。

杯（第73, 82図） 高台は低く、わずかに外方へふんばる。脚端面下端部をわずかにつまみ出している。口縁部は外上方にまっすぐにのび、壠部は外斜方に丸くおさめる。



第72図 第3号古墳出土須恵器実測図(1) (1 : 3)



第73図 第3号古墳出土須恵器実測図(2) (1 : 3)

表9 梶原第3号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特色	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
100	杯 蓋	口径(14.4)	口縁部がわずかに残存する。口縁部は直立気味で、端部は丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室内
101	杯 蓋	口径(14.0)	天井部はわずかに丸味をもち口縁部近くではぼヨコにひろがる。端部は丸い。かえりは内側し、端部は直立し尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。天井部は広くヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室内
102	杯 身	口径(12.0)	受部は外方に短くのび、U字形に窪み、縁部は丸い。たちあがりは肥厚し、上方にのび、端部は尖り気味である。	マキアゲ水引成形。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡青灰色	埴丘裾部
103	杯 身	口径(11.9)	口縁部がわずかに残存する。受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内側してのび、端部は直立気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	埴丘裾部 玄室内
104	高 杯	口径(10.9)	杯部は底部からゆるやかにカーブし受部にいたる。受部は外斜方に短くのび、端部は丸い。たちあがりは内側してのび、端部は直立気味に丸い。透かしを穿った痕跡がある。	マキアゲ水引成形。内面中央部は仕上げナデ。ロクロは時計回り。脚部には透かしがつく。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央
105	高 杯	口径 12.1	杯部と脚部がわずかに残存する。杯底部からゆるやかにカーブして口縁にいたる。口縁端部は直立気味に丸い。	マキアゲ水引成形。杯底部はヘラケズリ。内面中央部は一方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 不良 乳灰色	玄室内
106	蓋	口径 (9.5)	口縁部がわずかに残存する。口縁端部は内斜方に曲がり、尖り気味におさめる。	マキアゲ水引成形。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室内
107	壇	口径 8.8 器高 8.4	底部は丸味をもち、ゆるやかにカーブして脚部上位に最大限をもち、周囲して口縁にいたる。口縁部は短く内上方にたちあがる。端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリ。体部中位と上位の境に四線がめぐる。内面中央部は仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央
108	高 杯	底径 11.9	脚柱部中位から脚端部が残存する。脚部はラバ状に大きく開き、脚端部は上下に拡張する。透かしは長方形のものを2か所つつ。(上下一対?)	マキアゲ水引成形。脚柱部下位に2条の四線を施す。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央
109	高 杯	底径 8.5	脚端部はラバ状に大きく開き、下方に拡張する。	マキアゲ水引成形による。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 不良 乳灰色	玄室中央
110	高 杯	底径 8.0	脚端部はラバ状に大きく開き、下方に拡張する。	マキアゲ水引成形による。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 不良 乳灰色	玄室中央
111	高 杯	底径 8.7	脚端部はラバ状に大きく開き、下方に拡張する。	マキアゲ水引成形による。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 不良 乳灰色	玄室中央
112	平 蓋	口径 6.0 器高 14.8	体部はやや扁平な指円形をなす。口縁部は外方に開き、端部は丸くおさめる。ボタン状の胎土塊が肩部に2か所つく。	マキアゲ水引成形。底部から体部下位はヘラケズリ。体部中位から上位はカキ目。口縁部に数条の四線がめぐる。ロクロは反時計回り。	胎土 粗い微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央 完形品
113	壇	口径 12.4 器高 16.5	体部は扁平な球体をなす。頂部は外反して、口縁部との境に段をつける。口縁部はラバ状にのび、端部は外消して丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。底部から体部下位はヘラケズリ。体部中位に円形の穿孔がある。体部中位と頂部中位にそれぞれ2条の四線を施す。ロクロは反時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 淡明青灰色	玄室中央 完形品
114	壇	口径(13.3) 器高 14.8	体部は扁平な球体をなす。頂部は外反して、口縁部との境に段をつける。口縁部はひずみが著しいが、端部は丸い。	マキアゲ水引成形。底部から体部下位はヘラケズリ。体部中位に円形の穿孔がある。体部中位と上位の境に四線がめぐる。ロクロは時計回り。	胎土 粗い微妙粒を含む 焼成 良好 暗灰色	玄室中央 自然軸付着

表10 桩原第3号古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特色	成形・調整	胎土・焼成・色調	出土地点・備考
115	提瓶	口径 9.5 器高 26.4	体部は正円形で、前・背面とももゆるやかな丸味をもつ。口縁部はくの字状に外上方にのび、底面はやや内傾して丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。前面はカキ目調整。背面はヘラケズリの後カキ目。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 完形品
116	提瓶	口径 4.8 器高 13.0	体部は正円形で、前・背面とももほぼ均等な丸味をもつ。口縁部はくの字状に外上方にのび、底面は尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。前面はカキ目調整。背面はヘラケズリの後カキ目。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室中央 完形品
117	提瓶	口径 (8.9) 器高 29.9	体部は正円形。口縁部はくの字状に外上方にのび、底面はや内傾して尖り気味に丸くおさめる。	マキアゲ水引成形。前面はカキ目調整。背面はヘラケズリの後カキ目。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	墳丘盛り土上
118	提瓶		体部は正円形で、前面は丸味をもつかず、背面は扁平である細身の瓶部がつく。肩部にボタン状の胎土塊をつける。	マキアゲ水引成形。前面は不定方向の仕上げナデ。背面はヘラケズリ。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	閉塞石内 円板に粘土紐をまいた痕跡 を観察できる
119	杯	口径 12.1 器高 4.0	口縁部は外上方にまっすぐのび、端部は外斜方に丸くおさめる。底部との境際はヘラケズリにより明瞭な棱をなす。わずかに外方にふんばる短い高台をもつ。	マキアゲ水引成形。底部はヘラケズリの後粗いナデ。内面底部は不定方向の仕上げナデ。ロクロは時計回り。	胎土 微妙粒を含む 焼成 良好 色調 淡明青灰色	玄室 (南應石近く) 完形品

(2) 鉄器、その他の金属器

第2号古墳からは、多量の鉄器が出土している。大部分鉄鎌であるが、そのほかには石突状の鉄製品、刀子、摘鎌、鎌、刀などがある。

鉄鎌は図示したものが64点あるが、以外にも細片は多数ある。また、頭部のない細片は必ずしも種類は特定できないが、形状から大部分鉄鎌の茎部分と推定される。

120～125は平根系の鉄鎌である。石室中央西側の刀が出土したあたりから出土した例が多い。頭部全長は8～5cm、頭部幅3.5～2.3cmで、全長のわかる資料はない。120のみ頭部断面はやや厚いが、他は3mm程度と薄い。

126～144、151は細根系の鉄鎌である。先述の平根系鉄鎌と異なり、石室、羨道全体から出土している。盗掘等による移動を考慮しても、先述の平根系鉄鎌のように鉄刀周辺に固まって副葬されていたということはなかった。135は唯一全長のわかる資料であり、全長16.3cm、頭部全長3cm、厚さ2mmである。茎は断面長方形で、5×3mmである。茎断面は、方形ないしは長方形のものが多いが、141、142のように断面円形ないしは梢円形のものも少数ある。

個体識別は必ずしも判別できないが、出土状況などから、141・177・182、165・178、131・144・179、167・184、157・181がそれぞれ同一個体である可能性が高い。

184は、石突状の鉄製品である。長さ5.2cm、直径1.1cm、内径7mmと非常に小型である。矢柄程度のものしか挿入できず、用途に関しては必ずしも限定できない。

185は釘である。全長8.2cm、頭部長3cmで、頭部先端はつぶしてある。頭部が大きいことや他に同様の例がないことから、一般的な棺材の固定に使用された釘ではなく、何らかの特殊な用途に用いられた釘であろう。

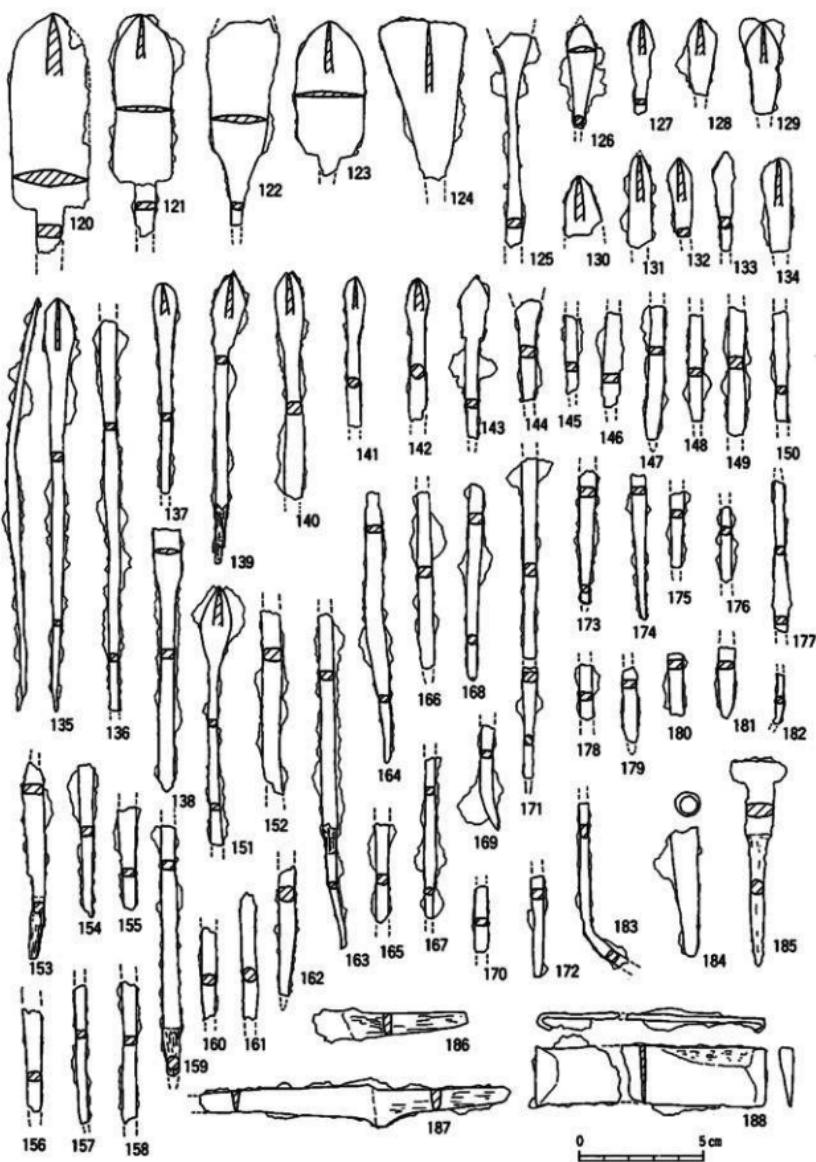
186、187は刀子である。全長は不明であるが、刃幅は1cm程度である。

188は摘鎌である。2つに割れているが、全長9.3cm程度、幅は2.3cmである。背の部分に木質が一部残っている。

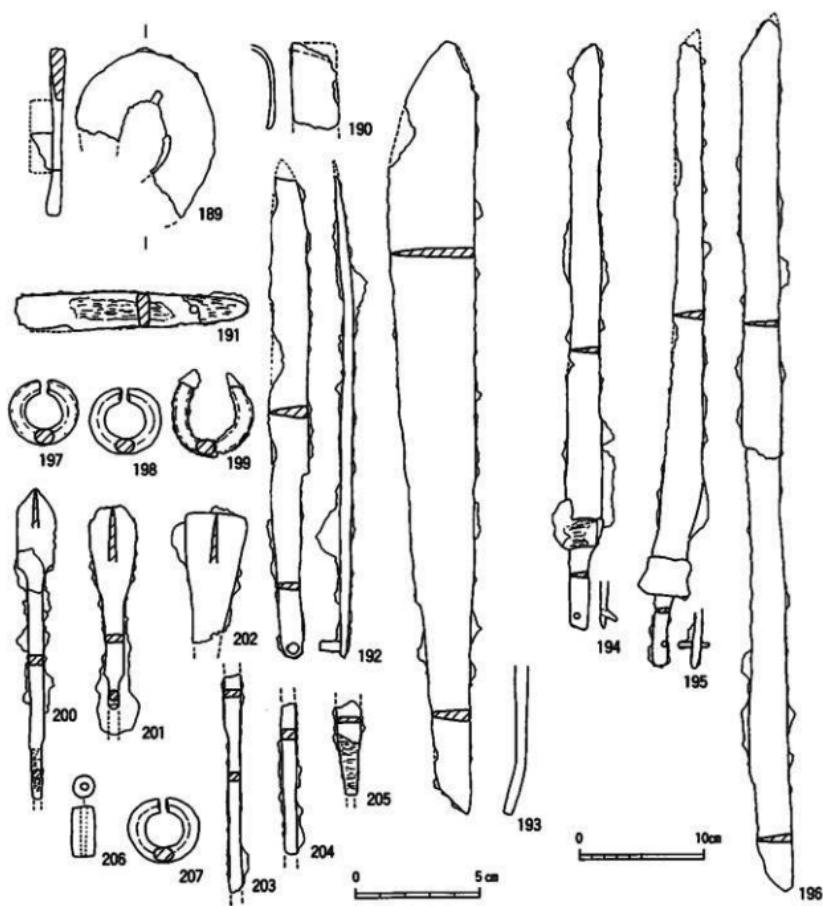
189～196は、刀およびその関連部分である。このうち192は小刀である。全長19.2cmであるが茎に目釘が残っていることなどから、刀子ではなく小刀として分類した。191は196の茎と考えられるが接合はできなかった。189、190も196の一部と推定される。196は刃部長70cm以上ある。出土状況を見ると、194、196が石室奥敷石手前から、195が石室奥敷石下から、192は両者の中间地点から出土している。193は形態が特異で、古墳時代のものかどうかは断定できない。ただ出土状況から推察すれば、副葬品であった可能性は高い。

197～199は、耳環である。199は羨道の閉塞石下から、197、198は石室入口付近から2点が近接して出土した。199は一部破損しているが、他は直径2.5cm内外である。

第3号古墳からは、鉄鎌3と茎片3、耳環1、碧玉製管玉1が出土した。200～202は平根系の鉄鎌である。第2号古墳出土のものに比べ概して小さい。203～205は鉄鎌茎であるが、前者の一部かどうかは不明である。管玉、耳環は何れも閉塞石およびその付近から出土した。



第74図 第2号古墳出土鉄器実測図 (1 : 2)



第75圖 第2・3号古墳出土鐵器他実測図 (1:2 1:4)

表11 拉原第2号古墳出土鐵器観察表

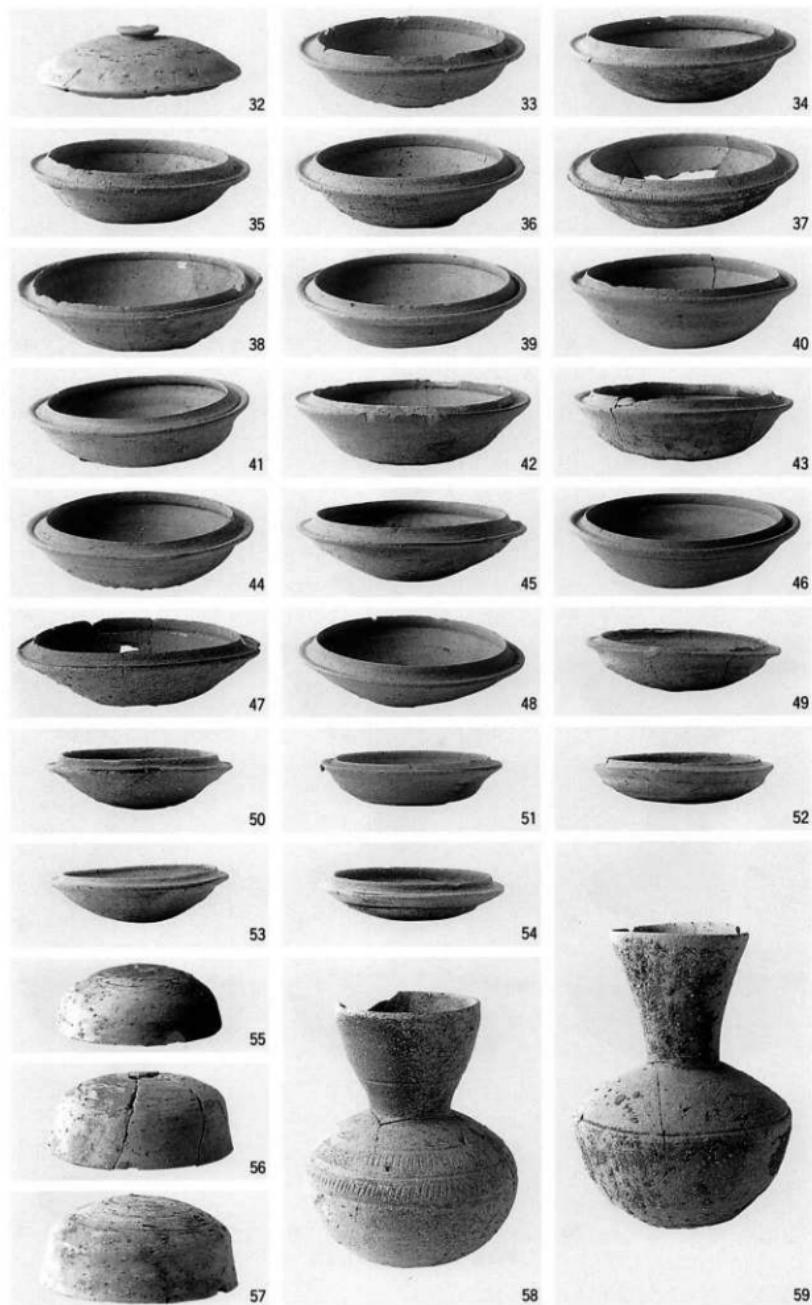
番号	出 土 位 置	名 称	全 長(cm)	刃厚さ(mm)	茎 厚(mm)	重 量(g)	備 考
120	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(9.4)	7		34.76	
121	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(8.7)	2		15.77	
122	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(8.48)	3		12.21	
123	第2号古墳(玄室中央西)	鉄鎌	(6.19)	3		11.95	
124	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(6.4)	2.5		15.68	
125	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(8.5)		6×3.5	6.94	
126	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(4.2)	2		4.27	
127	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(3.8)	2		1.24	
128	第2号古墳(表道)	鉄鎌	(3.08)	3		3.32	
129	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(3.75)	2		4.12	
130	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(2.4)	3		1.50	
131	第2号古墳(表道)	鉄鎌	(3.7)	2.5		3.28	144, 179と同一個体?
132	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(3.2)	3		1.93	
133	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(4.0)		5×5	2.44	
134	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(3.7)	3		4.49	
135	第2号古墳(表道)	鉄鎌	16.3		5×3	11.80	茎長12.8cm
136	第2号古墳(表道)	鉄鎌	(15.5)		5×3	10.00	
137	第2号古墳(玄室土器床上)	鉄鎌	(8.2)	3		4.50	
138	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(10.35)	2	6×4	8.32	
139	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(11.5)	2	5×3	7.13	
140	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(8.8)	3	6×4	8.02	
141	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(5.95)	2	5×4	2.93	177, 182と同一個体?
142	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌	(5.6)	4	径5	3.64	
143	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌	(6.4)	2	5×3	5.37	
144	第2号古墳(表道)	鉄鎌(茎?)	(4.0)		5×4	3.49	131, 179と同一個体?
145	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(3.2)		5×3	1.59	
146	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(3.8)		6×4	2.85	
147	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(5.25)		6×3	2.75	
148	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(4.2)		6×3	2.30	
149	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(5.0)		6×5	6.02	
150	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(4.4)		4×3	1.86	
151	第2号古墳(表道)	鉄鎌	(10.4)	3	4×3	7.02	
152	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(7.3)		8×5	8.10	
153	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎)	(7.8)		8×4	6.93	
154	第2号古墳(表道)	鉄鎌(茎?)	(6.2)		5×3	5.43	
155	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(4.1)		5×3	2.37	
156	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(4.0)		径5	2.61	
157	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(5.5)		4×3	2.50	181と同一個体?
158	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(5.8)		5×3	4.12	
159	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎)	(9.9)		5×4, 径5	8.05	
160	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(3.7)		6×4	2.72	
161	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(5.0)		径6	3.28	
162	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(5.25)		6×5	3.88	
163	第2号古墳(表道)	鉄鎌(茎)	(13.2)		5×4	9.28	
164	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎)	(10.7)		6×3	7.30	
165	第2号古墳(表道)	鉄鎌(茎?)	(3.9)		5×4	2.61	178と同一個体?
166	第2号古墳(表道)	鉄鎌(茎?)	(6.9)		5×4	8.72	
167	第2号古墳(表道)	鉄鎌(茎?)	(6.4)		5×3, 4×3	4.07	184と同一個体?
168	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(7.82)		6×4, 径3	5.56	
169	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(3.6)		5×3	3.75	

表12 桧原第2・3号古墳出土鉄器 他観察表

番号	出 土 位 置	名 称	全 長(cm)	刃部厚さ(mm)	茎 厚(mm)	重 量(g)	備 考
170	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(2.6)		5×3	1.13	
171	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(8.1+4.5)		5×5, 4×4	6.21+2.76	
172	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(4.05)		5×4	1.81	
173	第2号古墳(黄道)	鉄鎌(茎?)	(5.25)		6×4, 3×3	3.38	
174	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(5.8)		6×3	2.20	
175	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(3.0)		4×3	1.35	
176	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(3.0)		4.5×3	1.31	
177	第2号古墳(玄茎)	鉄鎌(茎?)	(6.05)		径4, 5×3	3.09	141, 182と同一個体?
178	第2号古墳(黄道)	鉄鎌(茎?)	(2.1)		5×3	1.28	165と同一個体?
179	第2号古墳(黄道)	鉄鎌(茎?)	(2.9)		6×3	1.56	131, 144と同一個体?
180	第2号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(2.5)		6×3.5	2.20	
181	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(2.78)		6×3	1.45	157と同一個体?
182	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鉄鎌(茎?)	(2.05)		径3		141, 177と同一個体?
183	第2号古墳(黄道)	鉄鎌(茎?)	(6.64)		3×6, 5×5	4.06	
184	第2号古墳(黄道)	石突状の鉄製品	5.2		径11	8.98	167と同一個体?
185	第2号古墳(玄室土器座上)	釘	8.2	径6	11×5	10.28	
186	第2号古墳(玄室奥敷石上)	刀子	(6.1)	9×3.5		6.86	
187	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	刀子	(12.4)	刃部厚4	茎8×4	15.47	
188	第2号古墳(黄道)	撫劍	(9.3)	幅(24)	刃厚2	5.68+9.19	
189	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鍔	(7×5.5)	厚さ5		27.30	
190	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	鍔	幅1.9	厚さ1.5		3.09	
191	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	刀子茎	(9.2)	幅15	厚さ4.6	24.12	
192	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	小刀	(19.2)	刃長5.6	厚さ4.8		
193	第2号古墳(埴輪)	刀	30.6	刃長22 幅35 厚さ4.8	茎長83 幅18.9 厚さ4.4		目打孔なし
194	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	刀	46.5	刃長400 幅24 厚さ5	茎長65 幅15 厚さ5		幅2 cm
195	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	刀	(49.7)	刃長440 幅24 厚さ7	茎長57 幅11 厚さ4		幅3 cm
196	第2号古墳(玄室鉄刀付近)	刀	69.5	刃長610 幅28 厚さ5	茎長(85) 幅28 厚さ5		茎は?
197	第2号古墳(玄室土器座上)	耳環	2.54×2.75	径7×6			全体に綠青
198	第2号古墳(玄室土器座上)	耳環	2.6×2.86	径7.7×6.3			銀色
199	第2号古墳(黄道)	耳環	3.4×3.27	径5.9×7.4			全面鉄錆
200	第3号古墳(玄室内)	鉄鎌	(12.3)	刃部厚2	6×3, 径4	10.84	
201	第3号古墳(玄室内)	鉄鎌	(8.46)	刃部厚3	7×3, 径4	10.10	
202	第3号古墳(玄室内)	鉄鎌	(5.2)	刃部厚3		13.60	
203	第3号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(8.56)	7×3 4×3		3.61	
204	第3号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(5.9)	6×4		4.01	
205	第3号古墳(玄室内)	鉄鎌(茎?)	(3.74)	9×2		3.05	木質が残存
206	第3号古墳(黄道)	碧玉	長さ1.98	径9.0×9.2			碧玉
207	第3号古墳(黄道)	耳環	2.6×2.82	6.0×7.6			全体に綠青



第76図 第2号古墳出土遺物



第77図 第2号古墳出土遺物



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71

第78圖 第2號古墳出土遺物



84



85



86



87

第79图 第2号古墳出土遗物



88



89



90



92



94



91



95



96



93

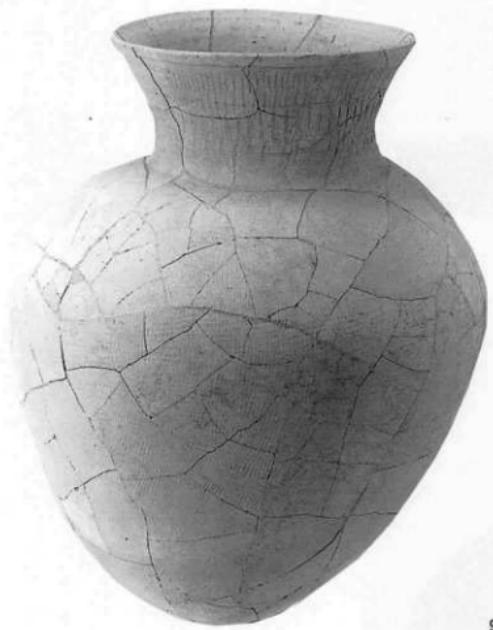


97



98

第80図 第2号古墳出土遺物



99



101



105



107



108



109



112



110



111



115



113



114

第81図 第2・3号古墳出土遺物



116



119

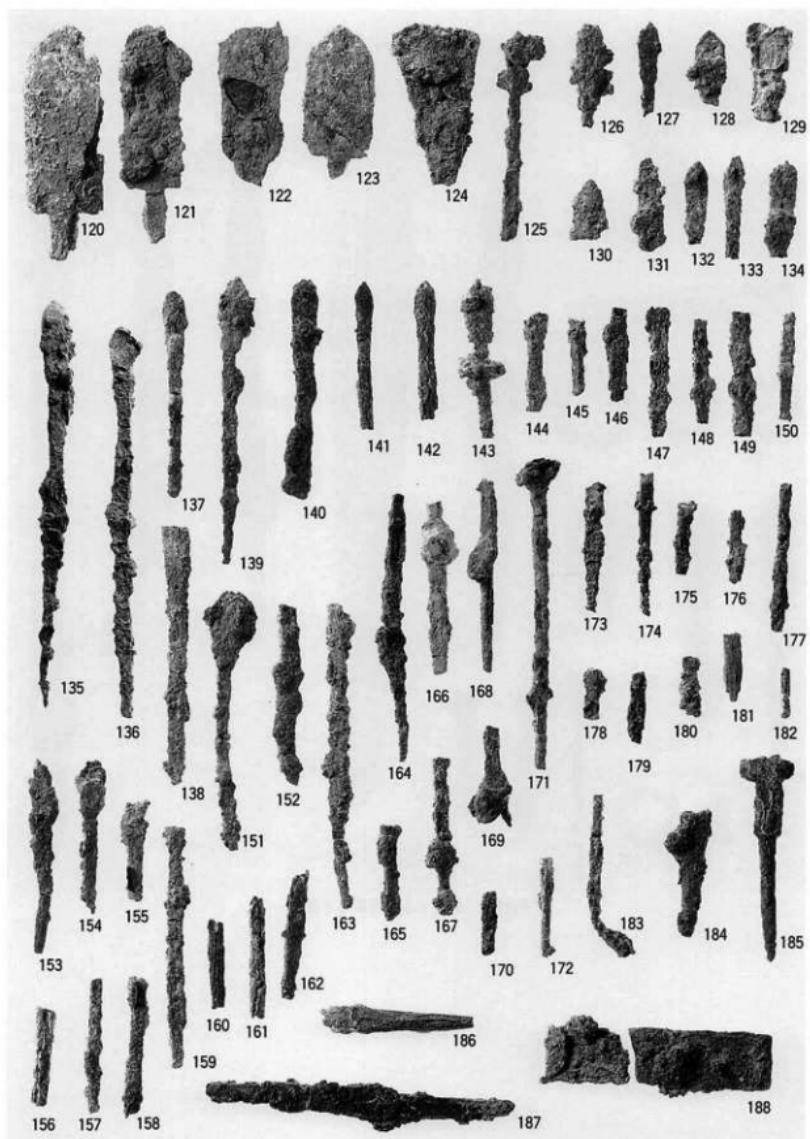


118

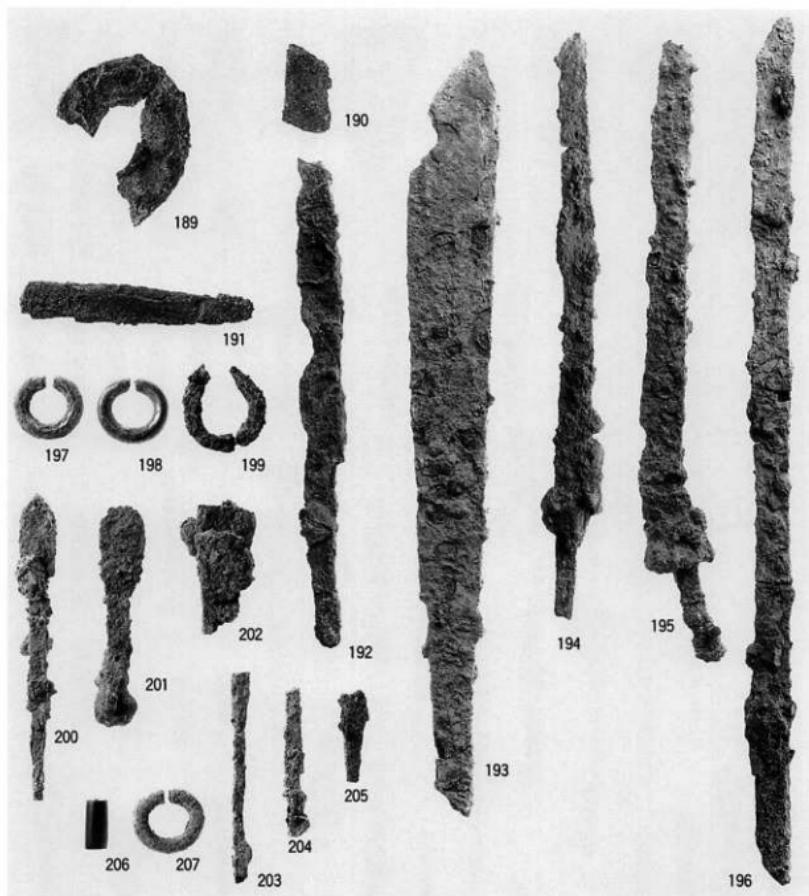


117

第82図 第3号古墳出土遺物



第83図 第2号古墳出土遺物



第84図 第2・3号古墳出土遺物

V まとめ

すでに「II 位置と環境」でも述べたように、高田郡内およびその周辺では古墳の発掘調査がかなり多く実施され、実態が比較的詳細にわかるようになってきた。ここでは、こうした近年の調査例をもとに横穴式石室が導入されるまでの古墳の変遷と出土須恵器の年代を中心に述べてまとめてみたい。

(1) 横穴式石室導入までの石室の変遷について

1963年広島県が行った羽佐竹パイロット開拓事業に伴い、羽佐竹の成安第1号～7号古墳、横山古墳、後原第1、2号古墳の計10基の古墳が発掘調査されている。⁽¹⁾成安第2、3号古墳は竪穴式石室であることから、調査者の潮見浩氏は、山間地帯における横穴式石室墳の開始がかなり遅れることを指摘している。⁽²⁾ただ公表されている図面を検討すると、成安第3、4号古墳は、側石は数段の石を積み、一方の小口部分が開放できるような構造をしており、通常の箱式石棺よりも一回り大きく、いわゆる横口式の竪穴式石室である。古墳の時期は、出土須恵器から見ると、成安第3、4号古墳はTK10併行期、他の横穴式石室は粒原第2、3号古墳よりも若干新しく、TK217前後の須恵器を出土している。成安古墳群は粒原古墳群の南西約2kmの近距離にあり、しかも粒原第2、3号古墳はTK209併行期で時期的には両者の中間に位置する。したがって本地域への横穴式石室の本格的な導入期は、粒原第2、3号古墳の時期で、しかも片袖式横穴式石室を形成している粒原第2号古墳の時期に相当する可能性が高い。

こうした横穴式石室導入以前に竪穴系横口式石室が存在することは、ほぼ安芸の全域で見られるということが近年判ってきた。東広島市の助平古墳は、MT15～TK43の時期に築造されているが、竪穴系横口式石室である。⁽³⁾同様の石室は、広島市空長第1、4号古墳（5世紀後半）、同湯釜古墳（5世紀末～6世紀初頭）などが知られている。これらはいずれも長さ4m、幅1.2～1.5m程度の大型の石室である。

一方、成安第3、4号古墳は、長さ2m弱、幅0.5m程度の石棺に近い大きさである。側石は、最下段の石は広口積みに積み、その上は小口積みないし長手積みに1～2段石を積んでいる。古い調査で、必ずしも明確ではないが、小口の一方に入口が存在した可能性が高い。同様な規模、構造の横口式の竪穴式石室は来木の石井ヶ原第2号古墳（TK43～TK209期）にも見られる。この古墳の場合、当初から南西側の小口石が抜き取られており必ずしも詳細な状況はわからないが、側石の構造などから横口式の竪穴式石室の可能性が高い。山県郡千代田町古保利第44号古墳（TK23頃）の石室も、南東側小口部分が破壊されているが、同様の石室と考えられる。また三次市陣床山第6号古墳（TK43併行期）なども同様である。⁽⁴⁾このように、箱式石棺をやや大きくした程度の石室も存在し、小口部分に入口があるような構造をしている。

石井隆博氏は、助平古墳の報告書の中でこの間の変化をまとめ、西条盆地内においては6世紀

前半に見られた竪穴式石室（箱形石棺の側石上に数段の石を小口ないし横積みにして乗せて箱形石棺より空間をもたせるもので、箱形石棺の構築手法と共通性をもつ）は6世紀後半になって竪穴式石室のような石積みの横穴式石室へと変化し、石室内部に須恵器を副葬するなど、祭祀形態も横穴式石室的になっていると述べている。

高田郡内への一般的な横穴式石室の導入期は、粒原第2、3号古墳の時期になってからと推定される。このうち第2号古墳は、石室が片袖式であり、奥壁は小型の石を積み上げている。副葬された須恵器が若干古いなどの点から、第3号古墳よりも古い。したがって、粒原第2号古墳あたりが本地域に最初に導入された本格的な初期の横穴式石室と考えられる。しかしながら粒原第2号古墳の片袖式横穴式石室そのものも片袖は形骸化しおり、すでにかなりくずれている。その後、成安第1、2、5号古墳、後原第1、2号古墳などの横穴式石室へと続く。これらの古墳からはT K217期前後の須恵器が出土している。

なお高田郡内の横穴式石室の一般的な共通点として、玄室内部に低い立石で仕切って棺床を形成したり、須恵器を割って棺床に敷いたいわゆる土器床が多い。背景には、豊富な須恵器生産が存在していたと考えられる。

横穴式石室の導入の時期も含め、いずれにしろ土器床などの問題に関しては今後の調査例を待って再検討したい。

（2）出土須恵器について

第2号古墳の須恵器は杯蓋、杯身、蓋、長頸瓶、高杯、壇、台付椀、甌、提瓶、大甌が玄室内や羨道部から出土した。また墳丘盛り土内からも大甌の破片が出土した。

ここでは、出土状況・形態の特徴から若干の考察を試みる。出土状況から古墳の埋葬時期、追葬時期は大きく3時期に分けられる。第1期—最初の埋葬に伴うもので、かき出された遺物の時期、第2期—棺床としての大甌の土器床とその上面に分布する遺物の時期、第3期—敷石上の遺物の時期（敷石の一部は土器床の上にかかる）である。

第1期は、羨道部西側の閉塞石直近の地点で玄室内からかき出されたように出土した須恵器と割られて敷石の間に詰められた須恵器である。58の長頸瓶、高杯1類（61）、高杯2類（60・62）、高杯5類（72～77）、高杯6類（78）、提瓶2類（94）などであり、高杯5類とセット関係になる杯蓋1類（1～5）もそのグループである。高杯2類は杯部にヘラ描き斜線文があり、脚部に2段の透かしが3方にある。また、提瓶2類は漏斗状の口縁部をもち、両側の鉤状の耳がさらに退化した角状の粘土塊がつく。これらの特徴はT K209型式、陶邑II型式5段階に相当する。このことから第1期は、6世紀第4四半期から7世紀初頭の間に位置づけられる。

第2期は玄室内の土器床を形成する大甌とその上に副葬された須恵器である。特徴的なものにまず、85の台付椀がある。体部中位と上位に2条の凹線をもつ椀と、安定感のある短い台脚とからなる。椀の底部はヘラケズリの後台脚を接合している。提瓶3類（95～98）は両耳がさらに形

骸化して、ボタン状の粘土塊として貼付され把手のなごりをとどめる程度の状態となっている。長頸瓶3類(86・87)は脚部の長さが短くなり、台脚と呼ぶにふさわしい形状となっている。これらの特徴はTK209型式、陶邑II型式5段階に比定される。また、高杯3類(63~65)と高杯4類(66~71)、高杯7類(79~83)は形態や調整の違いから若干の時期差が考えられるが、ほぼこれらの型式に含まれ、7世紀初頭前後に位置づけられる。

第3期は、蓋石の上から蓋2類(28~31)の擬宝珠形のつまみがつく蓋がある。これらの蓋の特徴は、口縁端部ちかくの内面にかえりをもち、かえりは口縁端部よりも下方へ突出している。かえりの端部は尖り気味である。これに類似するものは高田郡高宮町原田の明連窯跡、同じく來女木の石井ケ原第2号古墳などから出土している。これらの特徴は陶邑III型式1段階、TK217型式に比定できるもので、年代的には7世紀前半頃と考えられる。

以上のように、第2号古墳は、出土した須恵器から、6世紀第4四半期に築造され、6世紀第4四半期から7世紀前半にかけて、少なくとも2回以上にわたって追葬されたことが考えられる。

第3号古墳では、須恵器の提瓶、甕、平瓶、高杯が棺台石立石の入口側に接して集中して出土した。出土状況からほぼ同時期の須恵器と考えられる。提瓶は大型のものと小型のものがあるが、両耳がすでに退化していない。平瓶は形骸化した把手として扁平なボタン状の粘土塊を貼付している。高杯脚部の端部は上下に拡張して段をなす。これらの特徴からこれらの須恵器は、TK209型式、陶邑II型式5段階に比定される。また、閉塞石から出土した提瓶も両耳にボタン状の粘土塊がつくことから若干古いもののはば同時期のもので、6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる。

なお、床面から約20cmの位置から出土した高台付杯(119)はその形態から7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

以上、横穴式石室の導入期の問題、出土須恵器の時期を中心に考察を試みた。古墳の被葬者に関しては、古墳が低丘陵上に存在することや須恵器が豊富に副葬されていることから、須恵器の生産者集団などが想定される。いずれにしろ今後の検討課題としたい。

註

- (1) 潟見浩「高宮町古墳群の緊急調査」『広島県文化財ニュース』第19号 広島県文化財協会 1963年
高宮町「第1章 古代 第1節 高宮の遺跡と古墳」「高宮町史」1976年
なお、これら古墳出土遺物に関しては、広島大学文学部考古学研究室に保管されており、古瀬清秀氏の御好意で検討することができた。
- (2) 前掲註(1)文献
- (3) 東広島市教育委員会「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」I 1992年
- (4) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団「龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書」1976年
- (5) 障床山遺跡群発掘調査団「障床山遺跡群の発掘調査」1973年

- (6) 前掲註(3)文献 p96
- (7) 田辺昭三編『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年
- (8) 中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房 1981年
- (9) 中田昭「明達窯跡」「中國縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 広島県教育委員会 1979年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『石井ヶ原遺跡群』 1991年

報告書抄録

ふりがな	くいわらだい2・3ごうこふんはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	粒原第2・3号古墳発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書						
シリーズ番号	第194集						
編著者名	松井和幸・石井哲之						
編集機関	財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751						
発行機関	財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター						
発行年月日	西暦2001年3月23日						
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数		
頁	頁	頁	頁	頁	枚		
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
粒原第2号古墳	高田郡高宮町 大字原 田字鳥越1725-4	34384 155	34度 44分 59秒	132度 42分 28秒	20000522 20000914	667	町道勘部細河内 線改良工事に係 る発掘調査
粒原第3号古墳	高田郡高宮町 大字原 田字鳥越1725-4	34384 156	34度 44分 59秒	132度 42分 28秒	20000522 20000914	423	町道勘部細河内 線改良工事に係 る発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項		
粒原第2号古墳	古墳	古墳時代	古墳1基 (横穴式石室)	須恵器・鉄器・耳環			
粒原第3号古墳	古墳	古墳時代	古墳1基 (横穴式石室)	須恵器・鉄器・耳環・玉類			

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第194集

拉原第2・3号古墳発掘調査報告書

発行日 2001(平成13)年3月23日

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082)295-5751

FAX (082)291-3951

印刷所 西日本印刷株式会社